

嫉妬がましく思はれるが厭さに胸に秘めては居たもの、母の優しい言葉を聞くと氣の張が弛むと共に、い何れも彼も打明けたくなる、晶子は刷と顔を染めた。

「お前が厭だからといふ譯でもなからうが、何しろ此那風では困つたものです」と松子は震時思案して「何かへ、何か馴染の藝者でも出来たのかへ」

「い、え、そんな様子はありませんわ」

「でも夜泊する様では……」

「では爾でせうか」

「まあお前は子供だ」と松子は心配の中にて微笑せずには居られなかつた。此時表に足音がした。

「只今」といふのは高井の聲である。

「御歸りなさい。まあ久潤、能く家を忘れなさいのね」と菊子の高聲が聞へた。

「やあ實に素敵だね、満艦飾だね、進水式でもあつたのかへ、ブカ〜とどんどんガラガッタがツタバカ〜とどん〜」

「酔つて居らつしやるの？」

「いや決して……菊子嬢若し靈あれば水を一杯手向けてくれ給へ」

「何を仰有るんだか解らないわ」

此の問答を訊いて晶子ははつと胸を打つた。五郎の失態を母に見せまいと彼女りた。五郎は両手を伸ばして疊に額を付けたま、何やら唸つて居る。

「兄さん、どうなすつて？」

「憚う言ふ晶子の眼に涙が充滿溜つた。

「御母様が御待ちなすつて被居る事よ」

「いや、これは令嬢閣下」と五郎は身體を起して片手を突き菊子の唇で「有難う、願はくば御序に僕の頭から帽子を脱て貰ひたい」

「はい〜」と菊子は氣輕に帽子を脱て「五郎さん確乎なさいよ」

「床を敷いて寝さしてやれよ」と高井は晶子に向ひ「御母さんは？」
「御二階よ」

「實に困つた。珈琲の卓子の上に跳び上つて演説をして居た處を漸との事です。酔が醒めるまで御母様に會はせない方が可いでせう。おい君寝たまへ」と

「今は何時だ」と五郎は脇の間に顔を埋めて言ふ。
「もう十一時ですよ」と床を伸べかけた菊子が言ふ。

「十一時？晝の十一時か夜の十一時か、天文臺の調査報告に依ると日本には十一時が二度ある」「お晝のです」

「晝の十一時か、爾か、道理で南京蕎麥屋が未だ來ない。おい僕は昨夜親友と共に痛飲した事を君等は知るまい。僕の親友は飴屋の朝鮮人金木來のバア／＼といふ奴だ。僕は昨夜あいつの蕎麥を買ひ占めて交番へ持て行たら査公に叱られた。僕のみならず金木來も叱られた。是を稱してツバ杖と言ふんだ。嘘だと思つたら和田垣博士に訊いて見い」
「しやれば後廻しにして兎も角も寝み給へ」と高井は子供を賺す様に肩に手を添へた。

「いや僕のシヤレが秀逸であるか否や、先づ僕は母に訊いて見やう」
五郎はよろ／＼と起上つた。

「待て／＼、そんなに酔ふちや不可よ」

高井は確乎と捕まへて制めた。

「高井君、君は僕の親友だらう。僕が母に孝行を盡すのを妨げるとは何んだ」
「孝行は後にしたまへ」と高井は笑つて抱しめた。

「いや僕は行く、母は僕を待つて居るんだ。哀々たる父母吾を生んで劬勞すと孝經にある。僕は三島先生の講義を聴いた」

「待つてくれ」

「いや行かう」

押し合ふ最中に松子は二階から降りて來た。

「お母さんが彼來つたわ」と晶子は驚いて注意する様に五郎の袖を惹いた。
 「ヤあ母上の君」と五郎は膝を合せて規丁面に坐つたが、膝頭が露はれて、帯から時計がぶら下つて居た。

「お歸りなさい」と母は靜かに「五郎さん、大變に氣嫌が快い事ね、お正月だからでせう。だが、お正月もいつまでも續きやしませんよ」

「名論卓説仰せの通りです。天文臺の調査に依ると正月が三十一日にして二月に移るとあります。御母さんは實に博學多才智勇兼備の良將だ」

「五郎さん、お前は酔ふて居ますね」

「酔つて居やしません」

「酔ふて居なけりや、私は誰だか解るでせう」

「かるが故にゼアフオア、マイ母ですな大兵肥滿寛仁大度……」

「此の通りですからどうか醒めるまで……」と高井ははらくして言つた。松子は黙つて五郎の顔を凝と見詰めたが、體て靜かに立上つて二階へ上つた。而して椅子に凭れるや否や顔を掩ふて泣いた。

五郎は床の中に運ばれた。眼が覺めると夕方であつた。薄すりとした冬の日が障子に射して八手の葉を吹く風がかさこそかさこそと音立て、居る。彼は水が欲しかつた。で漸と重い頭を擽ると枕元に晶子が悄然と坐つて居た。

「御眼さめですの？」と晶子は言つた。五郎は直ぐに夜具の中に顔を引込めた。二人はいつまでも沈黙した。

「早く出て行てくれ、ば可い」と五郎は思つた。

「又た眠つたのかしら、今度眼をさましたら本當の心持を訊て見やう」と晶子は思つた。出て行てくれ、ば可いといふ者と眼をさましてくれ、ば可いといふ者とが互ひに根氣を比べて黙つた。喉の渴きが益々激しくなる、五郎は到頭負けた。

「水を」と彼は顔を出した。

「はい」

洋盃に酌いでくれた水を呑んで五郎は再び夜具にもぐり込んだ。

「兄さん」

「憚ういふ晶子の聲は顫えて居た。」

「貴方は私に何か不平が御ありなさるの？」

「無いよ、何も無いよ。彼方へ行つてくれ」と五郎は一瀉千里の勢ひでべらくべらくと饒舌つた。

「でもねえ兄さん、お母さんは大變に心配して被居るし、兄さんがお酒ばかり召上つて被居ると私どうして可いか解らないんですもの」

「何も無い、安心して彼方へ行てくれ」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

「だつて兄さん、貴方は餘り酷いわ。兄さんだつて本當の子ぢやなし、私だつて爾でせう。其れを考へずに御父さんやお母さんに御心配を掛けちや本當に濟まないと思ひますわ。御父さんだつて未だ保釋中でせう。お母さんも他に苦勞が山ほどあるのに兄さんの事で……其れではあんまり……兄さん……」

晶子は歎歎あけた。

「可いよ、解つた。僕は今日から酒を飲まないよ」

「本當？」と晶子は喜びの聲を放つた。

「本當だ。左様なら、彼方へ行てくれ」

「そんなに追出さなくても可いぢやないの？」

「愛する晶子よ。さあ禁酒の握手をしやう」

五郎は手を差出した。晶子は其れを握りもせずには然して、

「では私後で又來ますわ」

いそぐとして出て行く晶子の後姿を見送つて五郎は又もや夜具にもぐり込んだ。時計が五

時を打た。

電燈が點り出すと何となく淋しい。二日酔の頭の重さや身體の懈さと共に五郎は地の底へ引

四

電燈が點り出すと何となく淋しい。二日酔の頭の重さや身體の懈さと共に五郎は地の底へ引

込まれる様な気がする。

「詰らない、實に詰らない」

好きて酒を飲むぢやなし、酔うても気が浮きたぢやなし、酔さめの途切れ／＼に胸を衝て来るものは「慙うしちや居られん」といふ苦い思ひである。彼はしみ／＼と悲しくなつた。

「行かう」

彼は夜具を匆ね退けて起きた。何だか慙う他人の家へでも宿つた様な気がする、こそ／＼と帯を結び直して羽織を探したが見當らない。

「羽織なんか要りやしない」

着流しの上に學校服の外套を肩に掛けて出やうとすると晶子にはたと會つた。

「何處かへ被行やるの？」と晶子は不安さうに言つた。

「酒を飲み」に」と五郎は言つた。

「矢張り飲むの？」

晶子の顔は蒼白になつた。

「飲まずにや居られない」

「だつて兄さん、先刻禁酒をなさると仰有つたぢやないの？」

「其れは臨機應變だ」

晶子は黙つて下を向いた。其唇はわな／＼と顫へて居た。

「ぢや行つてくるよ」

「兄さん」と晶子は呼止めた。

「お羽織を召して被居やい」

「どうでも可いよ」

「でも寒いから」

晶子は直に亂れ籠から五郎の羽織を出して其れを肩に掛た。

「難有う」

五郎は其の儘女關を出た。晶子は黙つて見送つた。

見送られた五郎は門を出る時ふと振り返つた。其時彼は「可愛さうだ」と口の中で言つた。慙

ういふ芝居は何時まで続くだらう。だが仕方がない」

珈琲店へ行って火酒を煽つたが一向酔はない、向ふに學生が三人盛んに麥酒を飲んで居た。三人の間には其の頃の問題であつた社會主義の議論や新劇の批評や自由戀愛の可否など、殆んど取り留めもなき話が其れから其れと移つて行くのであつた。

「凡てが不徹底な世の中だよ」と肥つた男が丸い顔に制帽をちよこなんと載せて今年から蓄へかけたらしい短い髭を指の先で摘みながら言つた。

「うむ爾だよ。政府そのものが不徹底だから人民は無論の事だよ」と恐ろしく脊の低い瘡けた男は脳天から出る様な甲走つた仙臺人特有の音調で言つた。この男は何でも賛成する。凡て人の説の尻馬に従く事を以て特色として居るらしい。

「馬鹿言へ、少なくとも今の青年は徹底的だよ」と四角な顔に鐵縁の眼鏡を掛けた男が言つた。「其れもそうだな」と尻馬先生が賛成する。

「青年だつて皆不徹底だよ。第一吾々がなぜ生きてるのか知つてるものがあるか。なぜ親に孝君に忠でなければならんか、なぜ妻を娶らなきゃならんか、なぜ學問をしなきゃならんか、其

れに答へ得るものがあるか」

「實に爾だ」と尻馬君直に應じた。

「答へ得るものは無い」と眼鏡君が言ふ。「ないが吾々は生きて居るだけは事實だ。其れだけで可いさ、理窟なんか什麼でも可い」

「其れだから不可なのだ。それが不徹底だ。生存の理由が解らずに生きて居るのは動物的だよ。そこで僕は慙う思ふよ。吾人は人間になるべきか動物になるべきかを決めなきゃならん。なるなら従來の囚はれたる道徳に従ふも可い。人間になるなら新しく生れなきゃならん」

「おい君、一杯献がう」と五郎は火酒の壺を持つて椅子を近づけた。

五

五郎の態度に三人は驚いて其の方を向いた。

「君等は豪い」と五郎はちよび髭君に洋盃を差して「なぜ生きてるかを研究するなんてい。もう少し其話を聞かしてくれ給へ」

「いや、つまらない議論です」と尻馬君は謙遜らしく言った。

「つまらなくはないよ君」と五郎は次の人へ洋盃を向けて「僕の聞きたいのは人間はなぜ底でなければならんかといふ問題だ」

「其は君、人間であるからだ」と髭君は言った。「人間には血があり涙があり欲望があり理あり情實がある。其等が毎日吾人の体内で争鬭をやつてる」

「爾だ、假令ば親孝行はしたいが珈琲の酒も飲みたいといふ風に、異つた心持が……」と尻馬

君は続けやうとするを遮つて五郎は叫んだ。

「獨りになれば可いんだらう。どうだ諸君、人間は獨立すべきものだ。蚊が来れば蚊を叩く蠅

が来れば蠅を殺す、自分に煩さいものは片端から排除して自分を身軽にする事だ。親でも兄弟で

も隣人でも、悉く追拂つて獨立獨歩する事だ」

「賛成」と尻馬君は二度目の火酒を酌いでもらひながら「卓見ですな」

併し人間は獨りで居る事は出来ない。淋しくて仕方がない」と眼鏡君が言ふ。

淋しいなんて弱い氣を持つものは徹底的にはなれんさ」

「そうすると、君の議論に依ると徹底的な生活は不人情主義ですな」と髭君が横鎗を入れる。

「爾だ」と五郎は拳を固めて卓を叩いた。皿や洋盃や壺が一度に躍つた。「爾だ、不人情主義

だ、解つた。君等のお蔭で僕は發見した。難有う。僕は解つた。諸君の健康を祈る」

五郎は好きな事を饒舌り續けてふいと店を出た雨がしよぼしよぼ降つて居た。町は未だ八時

の人出に賑つて、濡れた道路は軒並の電燈に光つて居た。彼は此時初めて高井の下駄を穿い

た事に氣が付いた。外套を頭から被つて兩袖をだらりと下げ、急ぎもせず歩き續ける。

「奴等は僕の試験臺になつてくれた。獨りで考へるよりも他人と議論する方が、突然に眞理

を見するものだ」

彼は武者振ひする程に何ものか一大決心を起した様な氣がした。併し其れは何であるか、

解らなかつた。

「集まれい」

一聲だけでは物足りなかつた往き來るさの電車の音がけた、ましい。今や洋傘が停留所の左
右に重なつて居た。

「集まれい」と彼は二度び怒鳴つた。「人間でありたいものは集まれい」
電車を待つて居た人達はそろそろと集まつて來た。

「何だ〜」

「救世軍だ」

「いや酔漢だ」

「救世軍の酔漢か」

區々の批評の中に五郎は又も叫んだ。

「諸君、諸君は人間でありたいか」と彼は言つた。人々は笑つた。

「笑ふものは人間でないぞ」と彼は言つた。「人間は即ち人間だ、蓋し吾人は……」

言ひ續けやうとする時其の腕をぐつと曳いたものがある、其れは高井であつた。

「おい歸らう」と高井は昂奮した風で言つた。

「待てよ、一寸待てよ」と五郎は言つた。

「いや可い歸らう」

「抑人間なるものは諸君……」

「歸らう〜」

高井は腕を門に把て曳きする様に歩いた。群集はどつと笑つた。

「人間萬事塞翁の馬」と浪花節を唸つたものもあつた。電車は是等の人を瞬く間に渡つて去つ
た。

臂を執られて五郎はびしよびしよ歩き出した高井は黙つて居る。五郎も黙つて居る高井は菊
子の下駄を穿いて來たらしい。鼻緒が斷れたので片足だけ跣足になつて、赤い鼻緒の下駄を手
にぶら下げて番傘を持ち添へた。

「濟まないな」と五郎は酔ひながらも其れだけは思つた。

池の端へ出ると雨は車軸を流すが如く降て来た。實は傘を五郎に差しかけてひたと寄り添ひながら歩いた。其の片袖は絞るばかりに濡れて居た。片方に女下駄を穿いて片方は跣足である。一高一低に疲れた彼は、兩方ともに跣足になるべく氣が付いたのは既に家に近づいた時であつた。

「大丈夫かへ、苦しくないかへ、お母さんが御心配してるからね」

彼は恰ら骨肉に對する様に優しく劬つた。五郎は何となく體裁が悪くなつた。

「もう止さう。酒なんか飲で馬鹿を粧てるのは卑劣な事だ」と彼は思つた。

門を入ると一輛の車があつた。

「誰だらう」

「母が大阪へ歸るのかも知らん」

二人が恚う言ふ聲を聞いて晶子が慌たゞしく駆けて来た。

「兄さんは酔つて？」

「あ、随分」

實の返事を聞いて晶子は途方に暮れた様に二人の顔をちらり見廻して口を噤んだ。
「來客ですか」

「えい」

「誰ですか」

「あのね、侯爵」

恚う言つて晶子は又不安さうに二階の方に耳を敬だてた。

「侯爵？ 楠 侯爵？」

「實は問ひ返しながら菊子の持つて來たバケツで足を洗つた。

「侯爵？」と女關口にぐたりと頭を低れて腰を掛けて居た五郎は急に顔を擧げた。

「僕は會はう」

「君！」と實は抱付かうとするを拂つて五郎はばたくと階段を昂つた。室には侯爵と松子が卓子を挟んで語つて居たが、五郎の姿を見て松子は仰天して椅子を離れた。途端に侯爵が早く

も五郎を見た。

「やあ、待つて居たよ」

五郎は胸も露はに、弛んだ帯の端を横に下けて足元だけは確乎と踏んまへたが、胸から上はぐらくししながら、

「御機嫌好う」と挨拶した。

「うむ、大分酔うてる様ぢやの」と侯爵は笑つた。

「お正月なもんですから」と母は辯護する様に言つた。

「うむ、五郎さん。貴方は餘程酔ふとるか」

「いや酔ふちや居ません」と五郎は答へた。

「では私の話は聞取れるな。私も明日早朝又歸らにやならんから、用向だけ簡單に話して置かう。まあお掛け」

五郎は椅子に腰を下した。

「晶さんと呼んで」と侯爵は松子に言つた。母が晶子と呼ぶ間に侯爵は注意深く五郎の態度を

見た。聽て晶子が來た。

「私の用向は」と侯爵は和眼姿の腰の邊りに手をやつて直ぐ其れを卓子に載せた。平素佩劍の柄を握るのが癖になつて居るので和服の時には如何にも手持無沙汰に見える。

「お前達の結婚の事を取決めに來たんぢやが、大體の事は御前達の御父さんから聞いた。私は元より異存が無い。又お前達も異存があるまいな」

「はい其れはもう……」と松子は五郎の方を見やつた。五郎は右の方に頭を傾けて椅子の凭れに押し付け、微に唇を立て、眠つて居る。

「五郎さん、什麼したのです」と松子は五郎を揺ぶつた。

「何です」と五郎はむにやくと顔を撫でつ、言つた。

「結婚の事です、何とか御返事をなさいよ」

「其れは解つて居ます」

「異存がないかと仰有るんですよ」

「異存があります。大いにあります」と五郎ははつと眼を睜いた。

異存があるといふ一言を聞いた時松子は吃驚した。晶子の顔は蒼白になつた。

「何の異存だ」と侯爵は言つた。

「僕は侯爵が氣に入りません」と五郎は眞直に身體を起して兩手を自分の膝に突張りじつと侯爵の方に顔を出した。

「私が氣に入らん？」と侯爵は問ひ返した。

「どういふわけぢや」

「理由は數へきれません。第一に侯爵が元老面をしてるのが癪に障る」

「これく何を言ふんです」と松子は椅子を離れた。

「可しく打捨つて置くが可い」と侯爵は松子に言つて「それから」

「日本の國家が俺一人で背負つて立てるといふ風な態度が氣に入りません。元老々々と言つても只だ運の好い人が長生をして頭が白くなつたといふだけでせう。何も威張るほどの事ではな

いです」

「一理あるな、それから」

「貴方が軍人だといふ事が氣に入りません。軍人は何ですか、國家の番人です。山に立つて張番をしてれば可いのです。他の役人と異つた處がない。其れを軍人でなければ人間でない様に思つて居られる。生命掛けの職務だと言ふが、鑛山の坑夫、船の乗組員、傳染病の醫者、曲馬の馬、綱渡りの猿、みんな生命掛けだ。軍人ばかりぢやないです」

「其れも一理ある」

「その次には……」

「五郎さんく」と松子は再び言つた。五郎は止まらなかつた。

「武斷政治、佩劍政治だ。拳骨で人を嚇かす時代は過ぎましたぜ」

「これも一理ある、其れだけか」

「まだあります」と五郎は續けやうとした。

「いや待つてくれ」と侯爵は遮つて「私に對する苦情はいくらもあらうが、結婚に對する苦情

は什麼だ」

「無論です」と五郎は椅子をがたと音さして、僕は結婚しません。誰ともしません」

「どういふわけだ」

「どういふわけもありません」

何を言っても侯爵はにたくして居るので五郎は張合が抜けた。同時に侯爵も五郎の言葉の要領を得ぬに呆れた。

「どういふわけで結婚が厭か、理由を言ってくれんと困るぢやないか」と侯爵は笑つた。

「理由はありません」と五郎は奮然として言つた。

「僕は日本人ですか朝鮮人ですか、それが決まりません」

侯爵は凝と五郎の顔を見詰めた。

「君は何方になりたいか」

「僕は朝鮮人になりたいです」

「なに？朝鮮人に？」

「僕は日本が嫌です。日本人は大嫌です。野蛮な武士道は最も嫌です。戦争に強いといふより他に何の矜持もない人民は人類の屑です。小利巧で物真似が上手で利己主義で卑劣で其辭偽善が好で、金に卑しくて、何一つ取り柄がない、慙ういふ國は寧ろ呪ふべしです。」

「朝鮮人は什麼ぢや」

「朝鮮人は未開です。教うるに道を以てすれば日本人より豪くなる」

「併し滅亡したぞ」

「國なんか滅亡しても構ひません。人類は生れて生てれば可いんです。國籍なんか不必然な事です。空を飛ぶ鳥に戸籍がありますか、國を失つた朝鮮人は本當の自由の民です」

「君は本氣で其れを言ふか」と侯爵は少しく顔色を變へて言つた。

「貴方の様な古い人には解りません」と五郎は言つた。

八

五郎の暴言に晶子も松子も全く顔色を失つた。一旦怫然とした侯爵は直に聲を和けて言つた。

「君は酔とる様ぢやから、議論は止めにして兎も角肝腎の話に取掛らう」

「僕には肝腎の話がありません。僕は日本人でない以上は日本人を妻とする事は厭です」と五郎は決然と言つた。

「確かに爾か」と侯爵は急々我慢がしきれぬ様に氣色ばむだ。

「確かに爾です」

「君は大島を親と思はんか」

「思ひません」

「晶子は厭か」

「厭です」

「其れでは止むを得ん」と侯爵は卓子に置いた手を引込めて胸の上に組み合せ、

「私は見損つた」

「五郎さん〜」と松子ははら〜して宥める様に言つた。「お前はお酒で氣が狂つたのですか大切な事ですよ。よつく氣を落着けてね」

「僕は徹底的になるんです」と五郎は叫ぶ様に言つた。

「五郎さん、其れは餘り亂暴過ます。私の顔を見ておくれ、私はお前を育てた母ですよ。私の顔を」と松子は涙聲になつた。

「僕には親がありません。其那義理だの情愛だの、面倒臭い事は僕には解りません其れではお前は……」

「憚う言つた時松子は胸が充満になつて手巾で顔を掩うてしまつたが、颯てぐたりと「お母さん」と晶子は走り寄り顔を覗いたが直ぐ室を出た。と颯て高井と菊子が……つて來た。

「どうかなすつたのですか」

「兄さん、お医者さんを」と菊子も言つた。

「い、え大丈夫、い、え〜」と松子は漸と氣を取直して「皆さんに失禮を申し

其の顔は既に此世の人でなかつた。彼女は人々に禮を言つて五郎の方を見やつた。

「高井さん、五郎は話にならん馬鹿者ぢや、私は見限つた」と侯爵は立ち上つ

これで私は歸る。晶子、お前ももう諦めろ」

出て行かうとするを制める様に實は叫んだ。

「閣下少々御待ち下さい」

侯爵は立停まつた。

「五郎君」と實は五郎の傍に寄つて言た。「君は什麼したんだ」

「どうもしない」と五郎は冷やかに言た。

「君は晶さんとの結婚を拒絶したのか」

「うむ」

「なぜだ」

「僕は厭だから？」

「五郎君、君は晶さんを愛してると言たぢやないか。晶さんも君を愛してゐるんだ。實際晶さんを幸福にするものは君より他にないのだ。其れを今更ら君は晶さんを捨てやうといふのか。晶さんを欺き僕を欺くつもりなのか。爾ぢやあるまい、ねえ君、爾ぢやあるまい。君は恩義に背

き愛情を弄ぶ様な人間ではない是は一時の戲言だらう。爾だらう？え？、爾だらう。折角侯爵も御出になつたのだ。判然と答へてくれたまへ」

「僕は判然と答へたよ。厭になつたから厭だといふだけだよ」

實は凝と五郎を見詰めた。

「おい五郎君」

「君は晶さんを殺すつもりか、君は晶さんを殺すつもりか」

「君は晶さんを殺すつもりか、君は晶さんを殺すつもりか」

九

「晶子さんが死なうと生きやうと僕の知つた事か」と五郎は横を向いて言つた。

「五郎君、君の頭に悪魔が入つた。君に乘られた晶子さんの前途をなぜ考へてくれないのだ。晶子さんを不幸に陥れるのは男としての取るべき道か什麼か」

「もう可いよ、君なんかの説法は聞きたくないよ」

「僕の言ふ事を聞かないといふのか。あ、君は什麼かして居る五郎君、僕の一生の御願だ。どうか晶子さんを幸福にしてくれ給へ。若し晶子さんが此のまゝ、不幸な境遇になると、僕の苦心は凡て水の泡だ」

「君の苦心？」と五郎は顔を擧げた。二人の眼と眼がひたと會つた。高井の眼から燃ゆる様な情熱の光が迸つて居るとすれば五郎の眼からは骨と肉とを寸々に切り刻まれる苦痛の叫びが溢れて居るとも言へやう。

「自分を捨て、戀人の幸福をのみ祈る義人よ」と五郎は言ひたくなつた。「僕の心をも汲んでくれ、僕だつて君には少しも劣らない苦みがあるのだ」

「慙う思ふ五郎の心は知る由もない。實は只だ憤怒と絶望に慄へて居た。」

「僕はく、君と絶交する」

「よしッ、絶交しやう」

「逆も駄目ぢや、皆が諦めい。晶子、お前も決心するが可い」

侯爵はつか／＼と出て行つた。松子も晶子も實兄妹も見送りに出て行つた。獨り残つた五

郎は黙つて人々の足音を聞いた。

「左様なら御機嫌よろしう」と聲々が言つた。車が門を出たらしい。五郎はよろ／＼と椅子を離れたが、廳で再び腰を落して卓子の上に顔を當てた。

「凡てが計畫通りに行つた。僕ももう是れでおしまひだ」

「慙う思つて彼は霎時動かなくなつた。涙が止め度もなく落ちる。」

「静かな足音がした。晶子の蒼白な顔が現はれた。」

「兄さん」と彼女は言つた。「お母さんが病氣になりました。只今お醫者を呼びに高井行やいました」

「彼方へ行つてくれ」と五郎は言つた。晶子は黙つて五郎を睨めたが、廳で茶道具の室を出て行つた。

「勘忍して／＼／＼／＼」と五郎は口の中で繰返した。而して寢椅子にばかりと倒れに起上つてペンを取上げた。

「高井君」と彼は慌しく書いた。「愛する者の幸福のためには自己を捨てざるべから

格言は僕が生れて初めて君に教へられた。而して其れを實行する君の人格は僕より高き事數十等なる事も初めて知つた。晶子を幸福にするものは僕でなくて君である。君より他にはない。僕の父母は朝鮮人である。僕の血は純か不純か其れすら解らない。僕のはのめくと晶子さんの良人たる事が出来やうか、怠惰で懦弱で卑劣な朝鮮人の血を承けた僕は日本人と結婚する資格が無い。此故に僕は日本を去るのだ。僕は朝鮮人として生きて行く、再び會ふのは何時かは知らんが、左様なら愛する友よ。晶子さんのために自重してくれ。晶子さんの運命を君の手に一任して僕は日本に訣別す。

最後の一句を書き終つた時彼は堪まらなく悲しくなつた。彼は泣き出した。時計は一時を打つた。

「せめてお母さんの顔だけでも見て行かう」
彼は静かに階段を降りた。

襖を明けると蒲團の襟から出て母の青白い顔と其の載せた氷嚢が眼に付く、氣分が静まつたか今ま熟睡して居る。其傍に蒲團も敷かず、小襦一枚を掛けたま、晶子が眠つて居た。五郎は先づしみんと母の顔を見た。肥つては居るが、老の年波は皺と共に繁く、脱け上がった額から氷嚢を漏る、白髪が目立つ。心臓が悪いので熟睡の折でも時々呼吸が塞つた様に胸に波立たして肩まで揺るのが母の癖である。

「お母さん」と彼は室の中に入つて肚の底で言つた。「僕は不孝者です。恩知らずです。併しどうしても飛出さなければならぬのです。僕の爲る事は正しい事です。後日御解のいたらお母さんは屹度僕を賞めて下さるでせう。二十五年間育て、下さつた御恩は何れ御返します。どうか御身體を大切になすつて下さい。左様なら」
彼はもう一度母の顔を見直した。而して枕元にある葡萄酒を洋盞に注いだ。

「眼が覺めたら、それを御飲み下さい。これが御別れの杯です」
彼は漸く去りかけた。竊と襖を出やうとして晶子の顔を凝と見た。晶子は眼をばつちんいて居た。五郎はぎよつとして立悚んだ。

「兄さん」と彼女が小聲に言った。「彼方へ参りませう」

銘仙の寢巻に帯を締め直して晶子は静かに起つた。五郎は何んにも言へずに其後に従いた。

二人は玄關の二疊に出た。

「兄さん」と晶子は再び言った。

「兄さんは何處かへ行って御しまひになるんでせう」

聲は小さかつたが鋭かつた。

「いや別に」と五郎は言った。

「い、え、私知つて居ます。私は決して御止めは致しません。ですけれども私たつた一言兄さんに言ひたい事があります」

「今ま其那事を言はんでも可いぢやないか。何れお前の話を聞かう」

「嘘よ兄さん。今までなければ兄さんは今夜中に何處かへ行って御しまひになるぢやないの？」

「怒う言つて晶子ははらくと涙を零した。

「私に打明けて下さつても可いぢやないの」

「晶さん、お母さんが眼覺めると不可いから静かにしてくれね」

此時高井がのそりと暗がりから出て来た。

「五郎君、僕の室へ來んか」

「いや僕は」と五郎は澁つた。

「御室へ行きませう」と晶子が言った。

「僕は散歩に行かうと思つてるんだがね、どうも飲み過ぎで氣持が悪い」と五郎は漸と口實を見付けて言った。

「私も散歩に御伴しますわ」と晶子は言った。

「其れが可い、行つて來給へ」と實は暗い聲で言った。「御母さんは僕が添いてるから」

五郎は是非なく玄關を出た。晶子も共に出た。實は獨り見送つて居た。

二人は何時まで黙つて歩いた。正月の寒い風がひゆう／＼鳴て過ぎた。池の周圍の柵の上は眞白に霜が降て居る。五郎は外套を着なかつた。晶子は羽織を着なかつた。二人は骨の底まで浸み渡る寒さを怵へて歩き續けた。空には月が無い、凍る様な雲の色が一面に屋根々々に蔽

さつて、上野の電燈も待合の門燈も只だ悲しさうに赤く瞬いて居る。

「何處まで行くの？」と晶子は言た。

「お前寒からうね」

「い、え……寒くたつて構はないわ」

「家へ歸らうか」

「だつて兄さんは御歸りにならない積なんでせう」と晶子は悲しさうに顔を上げた。

一一

二人は切通しまで出て又同じ路を戻つた。互に何か言はうとして居るが、其れを言ふのが非常に恐ろしい様な風であつた。そこで又黙つた。

「ねえ晶さん」と五郎は言ひ出した。「僕は晶さんに言ひたい事があるんだけども言はずに置かうと思ふよ」

「えい私も聞きませんわ、解つて居ますもの」と晶子は低首れて言た。

「うむ其れが可い、今となつてはね」

「でも兄さん、私に一言だけ言はして頂戴ね。私ね、生命のある限り兄さんを思つて居ますわ」

「難有う。併し其れはお前の兄としてだね」

「い、え兄さん、良人として思つて居ますわ」と晶子は決然と言つた。

「其れがお前……」

「あ、何も言はないで頂戴。私、兄さんから死刑の宣告を受けるのは早いわ兄さんが必ず私の處へ歸つて被居る時がありますわ」

五郎は霎時黙つて「僕は什麼してお前と別れなければならぬのか知てるか」

晶子は答へなかつた。而して何と言つたら可いか悩んでる風であつた。五郎の肚の中では恚那事を言ふつもりがなかつた。併し少くとも晶子に自分の決心は止むを得ない事だといふ事を知らせたかつた。

「其れはねえ兄さん」と晶子は言つた。「兄さん、私の御父様がお厭なんでせう」

「いや爾いふわけではないが」と五郎の

こ。

「では兄さん」と晶子は魔へる様な顔で
すか」と言ふ様な色が見えた。五郎も直ぐ
たかつたが其れが言へない。

九上た。其れでは「では私を嫌つてるので
氣が付いた。」「お前を愛してるんだよ」と言ひ

「お前はね、高井の妻にならなきゃならない。高井は僕より遙かに人格が高い」

「其の理由なの？」と晶子は案外といふ風に言た。

「理由は什麼でも可いよ。兎に角兄さんが最後の御願だ」

晶子は靜かに歎歎りあけた。而して涙聲で言つた。

「兄さんは随分無理だわねえ」

「なぜだ」

「兄さんは初めに私と高井さんと結婚しろと勧めなすつたでせう。私は氣が進まなかつたけれども、私と兄さんとは兄妹だと思つて居たし、菊子さんが兄さんに戀してる事を知つたもんですから、兄さんと菊子さんとの事を纏めるために私が承知しましたのよ。すると、兄妹でない事が解つて、御父様からあのお話があつてから私達の心持は異りましたね。是が自然なんだと

思ひますわ。初めは不自然の約束なのですもの、其れを今又元との不自然に復れと仰有るのは御無理ですわ」

「其れがお前、最初は輕率だつたのだ」

「だから其の輕率を又た繰返すの？」

「いや、今となつては輕率でない。互ひにあの時から時日が経つと共に深く研究し合つたのだからな」

「貴方は私を捨てる様に研究なすつたの？」

晶子の聲は鋭かつた。

「爾ぢやない。人間は人格に生きて行かなければならない事が解つたのだよ。ねえ晶さん僕は高井にお前と僕と結婚するのだと打明けた時、高井は殆んど氣絶する許りに驚いた。だが彼は直答へた。晶さんを幸福にするには僕よりも君の方が適任者だから僕は諦める、寧ろ晶さんと君の幸福を祝したい、恚う言ふのだよ。而して彼には一點の愚痴がましい態度が無いのだ。愛は自分の慾望のためでない。徹頭徹尾愛するものは幸福を本位とすべきものだ」と高井が言つて

居る。晶さん、僕は生れて初めて大眞理を教へられたのだ。而して高井こそ眞にお前を愛して
る人だと解つた」

晶子は突然五郎の胸に頭を埋めた。

「兄さん、私どうしたら可いでせう」

一一

「どうしたら可いでせう」

これ晶子の一大疑問である。若し普通の女なら單に感情に任せて戀する男とはどうしても夫婦になつて見せると怒鳴るであらう。又其れも決して非理であると言へない。併し更に一步を進めた婦人、特に讀書と思索と精神的修養を積んで居る女ならば、生命を賭して自分を愛してくる二人の男に對して「什麼したら可いだらう」といふ疑問を起さずには居られまい。

戀を捨てる程悲しい事はない、其れは今現に晶子が嘗めつ、ある苦しみである。此の苦しみを思ふにつけて高井が如何に苦しいだらうといふ同情の念が胸一ぱいになる。だが高井が苦しい

からと言つて自分を犠牲にしなければならぬ理由が何處にあらう。

兄の言ふ處を聞けば兄としては實に道理だ。高井の人格に敬服して自らの戀を譲る。此の男らしい決心は人間の美點と精鍊された靈的生活の絶頂とでも言へやう。兄も矢張り戀に苦しんでるのだ。高井さんも兄さんも同じく戀を捨て、苦しむ、其れは何故だらう。

晶子ははたと此の問題に撞着した。

「なぜお二人が戀を捨てるのだらう」

突然赫灼たる光が一度にぱつと宇宙に迸つた様な氣がした。

「私のためだ」と彼は聲を出して言つた。何時の間にか立停まつて居たので、五郎も冥想を破られて言つた。

「何が？」

「私を幸福にしたいためにお二人が苦むんだわね」

「其れが什麼した」

「私何方へも参りませんわ。兄さん、今まで通りに兄妹になつて暮しませう」

「うむ」と五郎は曖昧に答へた。

「高井さんにも今まで通お友達で暮らしますわ」

「うむ、併し爾なると菊子さんは……」

「菊子さんも諦めるでせう」

「ではお前は終生人の妻にならない、菊子さんもならない、儂も高井も獨身で暮す事になるね」

「其れは爾ですわ」と晶子は躊躇した。

「其れは不可、無論僕の獨身は構はんが、高井兄妹は何なる第一に僕がお前と別れるべく決心したのも高井とお前を幸福にしたためぢやないか、其れでは僕の志は水の泡だ」

「だつて兄さん」と晶子は五郎の手を確乎と握つた。「其れより他に仕様がないうぢやないの？」

「仕様がないう」と五郎も繰返した。其處は我が家の門前であつた。

「いつまで言つても同じ事だ」

「では、どうしても？」

「一生のお願だ。高井と結婚してくれ」

「だつて兄さん」

晶子は恠へかねて聲を出して泣いた。

「聞えろと悪いよ」と五郎は其の肩先を引寄せて「晶さん、苦しいか」

「兄さんも苦しいでせう」

「左様なら」と五郎はもう居堪らなくなつて言つた。「左様なら」

「行くの？」

「劇時まで経つても同じ事だ」

「ではねえ」

晶子は逆らはずに、「そこまで送るわ」

二人は又もや歩き出した。再び切通しの下まで来た。

「お前を送つて行かう」と五郎は言つた。二人は又復元の路へ踏戻つた。

五郎は床に就いたが元より眠られなかつた。今夜は皆の眠静まるを待つて家を出やうといふ胸算なので彼は室内の書籍や机や椅子や凡てのものに別れを告げた。父や母の命に背き、學校も退學し、而して行方も知らぬ放浪に身を投げ出す間際に於て彼は流石に弱い氣も出る。

「俺は一體何處へ行くんだ」と彼は考へた。

「俺には家が無い」

慙う思つた時、例の南京蕎麥の笛の音が寒さうに聞えた。彼は頭を擧げた。

「爾だ、俺は朝鮮人だ。俺は朝鮮へ行かう」

彼の眼は輝いた。彼の心は一意朝鮮が戀しいのでもなく、又顔も知らず名も知らぬ生みの父に會ひたいといふ念が無かつた。只だ彼は朝鮮といふ國は何となく自分と關係が深い様に思つただけであつた。

「日本を去れば其れより他に行處がない」と彼は繰返した。今迄の凡ての因縁や習慣と絶つて

全然新たな生活に移るといふ一轉の氣は幾分か彼に緊張した心持を與へた。

「だが俺は金がない」

はたと困つたのは是であつた。併し彼は旅費や何かの事を考へるのは極めて卑劣な事だと思ひ返した。勞働者になれば可いのだと彼は決心した。

家の中は寢靜まつた。彼は身輕に旅装を調へた。持つて行きたいものは數々ある。愛讀の書や繪畫や友人の寫眞や晶子の作つてくれた刺繡の卓子掛や、數へ來れば限りもない。で彼は凡て其れ等を捨てる事に決めた心残りにならない様に、晶子の事は一切思ひ出さない様に寫眞も襟帶も凡て晶子から貰つたものは除外けた。襦衣二枚と外套と烏打帽と洋傘其だけである。

「左様なら」と彼は書齋に告別した。「俺はお前の主人ではなくなつたよ」

書架の燦爛たる書籍は別れを惜むが如く、自分の方に輝いた。彼はもう一度書齋を見廻して其れから室を出た。音せぬ様に忍び足で階段を下り、吻と呼吸を吐くと微に暗中に動くものがある。

「誰だ」と彼は小聲で言つた。

「私です」といふ聲は晶子である。五郎はぎよつとして「未だ寝ないの？」

「えい」と晶子は近附いて「兄さん、これを」

懐から一冊の手帳を出して五郎に渡した。

「これは何だ」

「あとで御覧になると解りますわ」

手紙の代りだらうと彼は思つて衣匣に入れた。

「もう行被やるの？」と晶子は言つた。

「あ、では身體を大事にしてね」

「では兄さんも御身體に氣を付けてね」

「難有う。併しねえ晶さん」と五郎は憫らしさが充滿になつて何か慰めてやりたいと思つた。

「行つて被行やい。何も仰有らないでね」と晶子は力ある聲で言つた。そして玄關の戸を靜かに開けた。見ると沓脱には既に五郎の靴が揃へてあつた。

「覺悟をしたんだ」と五郎は思つた。

「ではねえ晶さん」

晶子は何も言はず五郎の手に自分の手を觸れた。待ちかねたといふ風に五郎は其の手を確乎と握つた。二人の手は熱かつた。そしていつまでも離れなかつた。薄暗に互の顔は見えねども二人の心には極めて鮮明であつた。沈黙の五分間！互ひの心臓の鼓動まで聞えさう握つた手の血管が踴つて胸と胸に響いた。と、二つの手の上に涙がぼとくと滴つた。其れは何方の涙かは解らない。

「私ね、辛棒しますわ」と晶子は顫へ聲で言つた。「左様なら」

五郎は手を引いてよろ／＼と沓脱を降りた。門を出る時振り返ると晶子の白い顔の輪廓だけが見えた。

五郎は走り出した。泣いてる聲が聞える様な氣がしたので、猶ほ走り出した。廣小路へ出ると、軒並の電燈が輝いて居た。彼は不圖晶子の手帳を讀みたい氣になつた。衣匣を探つて手帳を取り出し、電燈の下に立て表紙を見ると其れはノートでなかつた。晶子の貯金帳であつた。「難有う」と彼は口の中で言つて直ぐ衣匣に入れた。

放浪

「旦那様、今日も人が集まつて來ますまい」

「どうしてだ」

「頃日の雨で米が流れて來ましたので、村の者が拾ひに行きました」

「流れて來た米俵を拾つて自分のものにしてやうといふのか」

「へえ」

「其れでは泥棒ぢやないか」

「へえ」

「泥棒をしても可いのか」

「拾はなければ損ですからな」

「損だからと言つて、竊盜罪になると却つて損ぢやないか」

「處が旦那様、主人が牢に入つても家族の者共が拾つた米があれば働かなくつても食べて行かれます」

「それが村中での習慣か」

「へえ」

「其れでお前も先刻から一寸暇をくれと言つて居たんだね」

「へえ」

「そんな馬鹿な事はならん。村へ行つて子供達だけでも早く勉強によこす様に爾言へ」

「處が旦那様、なか／＼來ませんよ」

「朝鮮人は其れだから不可のだ」

五郎は歎息して立上つた。而して窓から外を見た。四月とは言へども北韓は冬である。一望荒涼たる平野を蔽て灰色の空が今にも泣き出しさうに濁つて居る。樹木は稀に緑の草も無い。

「又た雨か」と彼は淋しげに言った。日本を去てから此に三箇月餘りである。彼は秋風嶺を過ぎ牙山を過ぎ、京城で嚴めしい總督府を見、流れくつて平壤に來た。其の間彼は總督施政の不平の聲を聞いた。韓人無智の實狀をも見た。新興國人と舊廢國人の自然淘汰の慘酷さに戰慄した。優勝劣敗の嚴肅な意義に驚いた。見るもの聞くもの彼の眼には驚異であつた。其の驚異が次第に慣れるに従つて彼の心に残つたものは只だ左の一句であつた。

「日本は厄介な國民を背負ひ込んだものだ」

「愆う思ふと共に彼の頭には絶えず屈辱の念があつた。『俺は朝鮮人だ』

愛する養父母及び晶子、尊敬する先輩や友人、其れ等は悉く日本人である。自分自らも日本人であると思つて居たい。併し一點胸に蟠るものは戦血統である。此の蟠りが時々胸を曇らして言ひ知れぬ慙愧と衰態に引入れるのであつた。半ば日本人であり半朝鮮人である彼は此儘に見過す事が出来なくなつた。

「日本人と朝鮮人とを相當に親密にさせるのが僕の天職かも知らん」
彼れは愆う思つた。此の考へは彼れに取つては赫灼たる光明であつた。

「これだ〜」と彼れは叫んだ。

日本人に養はれて育つた事も日本人を戀した事も、其の戀に破れて朝鮮に放浪して來た事も畢竟天が命じたのだ。日韓和親のため僕を地上に降したのだ。爾でなければ僕の生涯は餘りに無意味である。

此の喜悅から彼は一身を韓人教化に委ねやうと決心した。そこで彼は平壤に居を構へた。家は市街の北に當る小さな村で長らく日本人の奴隸になつて居たといふ男を備ひ入れた。而して村人の長幼を問はず日本語や日本の文字を教へるべく計畫を立てた。併しながら其れは殆んど絶望に近きものであつた。

「ロハでは駄目ですよ」と例の下男が言つた。

「ロハでなくては誰も來はしまい月謝なんか取つては不可」と五郎が言つた下男の金公——彼の名は金大虎であつた——は眼を圓くして、「いや、月謝ちやありません。此方から手當をや、なきや誰も來ません」

「金をくれて物を教へるのか」

「亞米利加人の學校ではお金も着物もくれます」と金公は言つた。實を言ふと金公は前に酷く使はれたので日本人よりも米國人が好きなのである。

二

凡てが慪ういふ風であつた。日本人が韓民を愚弄して居るに拘はらず、米國人は金を與へ衣服を與へ、書籍を與へて其の教會に村民を引き付ける、これには到底敵する事が出来なかつた。五郎の學校へは誰一人として近寄るものがない。そこで五郎は村の辻に立て説法すべく決心した。

「眞に韓國を憂ふるものは私の許へ来て下さい。日本は多大な同情を以て諸君を文明に救ひ上げやうとし、諸君と兄弟にならうとして居るのだから、決して危む事なく日本と親密になつて下さい。文字や會話は私が教へてあげます凡て日本人に對する苦情があつたら私は必ず解決を付けませう」

毎日々々慪う言つて村々を叫び廻つたが依然として集まるものはなかつた。元來韓人は無智で

あるだけに形式を尙ぶ風が熾で身體に燦爛たる金の光を着けて居ると、どんな人でも尊敬する普通學校と稱する小學校の教師は悉く金筋を着け、腰に長い劍を佩いて居るのは韓人に對する威嚴を保つための政策である金の光と長い髻と高い帽子これがなければ三文の價値もない人と見做される。彼等は米國人の大きな體格や高い鼻や、赤煉瓦の建物や、ピアノや風琴や其等を見てさへ矮軀で粗暴で喧嘩好きな日本人よりは遙かに優つたものだと思つて居る。

「村の者が教會へ行つて何を教はつて來るかね」と五郎は金公に訊ねた。

「神様の事です」と金公が言つた。

「神様が什麼だといふのだ」

「神様は私達に毎日のパンをくれる。着物をくれる。私の手からお前達に分けてあげるお金や何かは皆な神様が下さるのだ。お前達は神様の子であるから其れを忘れてはなりません。慪う言つて教へます」

「それなら日本も同じ事だよ」

「いや、異ひます。日本には神様が居ません。日本の神は弓や鎗を持つてる軍の神です。だか

「日本人は戦争をして人の國を奪りたがるのです。米國人は決して人の國を奪らない人にパンや着物を與へる。此の慈悲深い神は日本にありませんと憊う言ひます」

「そんな事を言ふか」と五郎は驚いて「お前は其れを信ずるか」

「お金や着物をくれるから爾だらうと思ひます」

「あ、爾か」

五郎は歎息して「併し私は米國人よりも、つと善いものをお前達に與らうと思つてるのだ。お前達と日本人とは同じく東洋人で、人種が同じなのだ。同人種が兄弟の様になつて働いて此の世界を美しくする様にしなければならぬ。金の力で世界を抑へ付けやうとするのは米國的だ。仁義を以て世界の平和を作らうとするものは日本だ。金を貰ふよりも、もつと精神的な靈的なものを得る方がどれだけ尊いか比較にならないのだ。解つたか」

「解りません。矢張お金の方が可いですからな」

「うむ、一體お前達は何が一番の望みだ」

「まあ温土呂に寝轉んで煙草を呑んで賭博でもやつて暮せればね」

「それだけか」

「外に何かあるもんですか」

「お前は世の中に恐ろしいものがあるか」

「恐ろしいものは役人と黄帝さまですな」

「役人がどうして恐い」

「どし／＼牢に入れますから」

「黄帝様とは何だ」

「神様でさあ、此の神様に逆ふと直眼が潰れたり足が折れたりします。本當です嘘だと思つたら 箆者に聞いて御覽なさい」

金公は憊う言つて霎時五郎の顔を見詰め、

「お前さんは箆者をやりませんか、あれをやると人が集まりますよ」

五郎は呆れて黙つたが、此の時不圖思ひ付いた事があつた。
「何も手段だ。やつて見やう」

「怒う腹に決めたが其れにしても先づ金公を感服せしむる必要がある。」

「實は金公、僕は占筮が非常に巧いんだ。僕のは黄帝様のなんのて其那頭に角が生えてる様な神様ぢやないのだ」

「どんなものですか」

「太陽だ。日本は日出國と云つて太陽の本家だ。太陽は世界中を照す、例へば大きな鏡で世界を映してゐる様なものだ。其れを凝と見詰めると人の運命がちやんと解るんだ」

「爾ですかね」と金公は半信半疑で、其れでは私の心を見て下さい。私が今何を考へてるか「試験だ」と五郎は思つた。而して起て窓から外を見た。日は沈々として濁色の空から西へと落ちてゆく、紅い夕焼が黄色と混つて雲を彩どつた。彼は霎時それを見詰めて金公を顧みた。

「金公」と彼は嚴かに言つた。

「へえ」と金公は威嚴に壓されて膝を折た。

「お前は今何考へて居る。私の占筮が當れば此の家に残るが當らなければ米國人の家へ行かうと」

「い、え、其れは……」

「黙れ、神様に對して嘘を吐くと眼が潰れるぞ、此處へ来て太陽を見詰めて見い」

「へえ」と金公はもぢくして額の汗を拭き、「恐れ入りました」

「當つたらう」

「へえ」
五郎は自分ながら頓智の妙に感服して益々圖に乗つた。

「金公」

「へえ」

「お前は其れから毎も塀の隅に小便をするといふので太陽様が大變に怒つてゐるぞ」

「へえ濟みません」

「氣を付けろ、さあ是からお前が今まで什麼に悪い事をしたか太陽様に伺つて見やうか」

「もう澤山です」と金公は頗る恐縮して「どうも旦那は只の人ではないと思つて居ました」

五郎は其の夜いろく、占筮の法を考へた。無智な村民を感化するには、慙かる愚かしき手段をも取らねばならない。彼は慙う決心した。翌日金公は村中に語り廻つた。

「どうも豪いもんだ。どんな事でも當らない事は無い」

「噂が其れから其れへと傳はつた。迷信は弱者愚者の常である。日本でさへも相當の位置にありながら狐や狸を崇拝する者があり、出鱈目の筮竹や算木で一生の大事を決めるものがある。畢竟するに理智性に乏きものが智慧を他人に藉りるに過ぎないのである。」

金公の廣告に依つて其の日は村民がぞろぞろと押寄せた。五郎は當惑した。未來の運勢を見てくれと言ふもの、金儲をさしてくれといふもの、牛が病氣だから癒してくれといふもの、疝氣で困つて居るもの、姑が慘酷だからどうしたら可いだらうといふもの、いつになつたら女房が貰へるかといふもの、種々な取留めのない慾望や苦悶や嫉妬や恨みが並べ立てられた。無論

五郎は餘程韓語に慣れたもの、肝腎の處は金公に通譯させ、其れを一々紙に筆記した。人々の迷ふ處は凡ての道理であると五郎は思つた。人間としての苦悶を有りの儘に訴へて其の方向を決めやうとするには、遊戯や道樂で出来る事でない。思案に餘つて眞劍に我が身を占筮者の一言に託する敬虔な態度が見える。五郎は責任を感じた。

「これは輕率にすべき事ぢやない。人の運命を左右する重大な責任者として、僕は餘りに無鐵砲だつた」

彼は當惑した。

四

五郎は當惑しながらも左りとて此の儘中止すれば村民の信用を一時に墜とす事になる。どうかしななければならぬと思ひ直した。

「皆な此に集まれ」と彼は言つた。而して一同を集めて嚴かに言つた。

「お前達は餘り勝手過ぎる。神様を信仰しないで幸福を授けてくれといふのは親不孝をして孝

行者と呼ばれたいと同じ事だ。お前達の中に隣の畠から瓜を盗んだものがある。怪しからん事だ。どうだ」

隅に坐つてる一人の婆さんが吃驚して手を拱んで拜んだ。

「其れからお前達の中に流れて来た米を盗んだものが五六人ある。どうだ」

一同は顔を見合せて低首れた。

「其れからお前達の中に親を疎末にしてるものがある」慙う言つて五郎は跛の男が頭を下けたのを見て「其の男は跛だ」

皆が呆氣に取られて感嘆の呻を漏らした。

「其の他、大變に恐ろしい罪を犯してるものが十人ばかりある一々其れを言はうか」

「もう宜しい〜」と人々は言つた。

「僕が言はんでも皆が心に耻るが可い。そこでお前達は銘々に罪を犯してるのだから其の罪を淨めない中は太陽は決して幸福を與へない。可いか解つたか」

「どうしたら罪が淨まりますか」と一人が言つた。

「さあ其れだ待て〜太陽様に伺つて見るから」

五郎は自分の無鐵砲が着々として成功するのに勢ひを得て勿體らしく兩手を胸に拱み、天を仰いで呪文を唱へた。

「いろはにほへとちりぬるをわか、其れ達人は大觀す、カチユーシヤ可愛や狎わん猫にやんちう……」

口から出任せに唸り續ける兩眼をばつと睜くと村民共は頭を低れて一生懸命に拜んで居る。

「神様の仰せには」と彼は一段と聲を高めて言つた。「お前達は三七二十一日間毎晩此の家に集

まつて僕の説教を聞き日本の言葉を覚え、日本語で神様に祈禱する様にならなきやならない。

其の間は決して米國人の教會などに行つてはならん。若し當人が來られなければ代人でも宜しい。他人を誘うて來る事は神様の思召に合ふから成るべく多勢誘ひ合す様にするが可いぞ」

村人は手ん手に堅い約束をして家へ歸つた。五郎は獨り微笑した。だが此の微笑の中には餘りに馬鹿々々しいといふ自らを嘲る心もあつた。

「村民を救ふための手段だから仕方がない」と彼は思ひ直した。

翌日から村人は二倍になつて集まつた。而して熱心に五郎の教を聴いた。五郎は日本人が韓民を愛して居る事や日本の武力や文明の力が世界に冠絶して居る事や、日本の皇室は萬民を我が子の如く思つて下さる事やらを精しく語つた。そして簡単な日本語を教へた。無智とは言へ言に就ては特種の敏感を有て居る韓民は直に教へた處を覺えた五郎は益々乘氣になつた。百姓の中に河瀬に憑かれた重病の患者があつた。いろ／＼な禁厭や祈禱を施したが何の効もなかつた。金公は其の家族に頼まれて五郎に御祓を請求した。五郎は頗る困つたもの、行かなければ疑惑を招くばかりである。そこで彼は行く事に決めた。金公の案内で病人の家へ行て見ると、例の天井の低いアンペラを敷いた土壁の室に病人が寢て居た。五郎が入る前に其の苦痛を訴へる聲が外に聞えて居た。

五

少しばかりの苦痛にも大聲を擧て唸るのは韓人の癖である。病人は五郎を見て更に大きな聲で泣いた。其れは五十餘りの男で、相當に財産もあるらしい。女房といふのは三十七八の女で

小綺麗な装をしては居るが、顔の色が青く額に筋が隆起して折り／＼陰險な眼をしては人々を見廻すのであつた。金公の話に依ると此の家は有名な喚天下で而も女房は有名な吝嗇であるとの事だ。

「何處が痛い」と五郎は言つた。

「身體中が痛い」と病人が金公の通辯で言つた。

併し五郎の眼には此の男が重病人といふ程のものでもなく血色も普通である事が解つた。そこで彼は例の呪文を唱へた。

「起きて見ろ」と彼は言つた。

「起きられませんか」と男は又もや大きな聲で泣いた。

「起きて見ろ、お前は癒つた。起きて美味しいものを食つて美味しい酒を飲んで美味しい煎草を喫め、男はふいと起きた。一同はあつと呆れた。そこで五郎は女房に言つた。

「病人の好きなものを食はせろ、爾しなれば、癩がお前に乗り移るぞ」

言ひ捨て、家を出た。村人がぞろ／＼後から從いて其の顯著な靈驗を賞稱へた。此の事があ

つてから村中は五郎の噂で持ちきつた。其頃は五郎は名を改めて秋山武男と言つて居た。其れから彼は一村民を訪問した。そして怠け者を嚇かし不孝者を諭し、村民の憤風を一新する事に努めた。傍ら彼は種々な薬品を買入れて村民の病氣を癒してやつた。いつの間にか村は二派に分れた。其れは米國派と秋山派の二つである。

五郎の聲名が次第に高くなる村民は漸々に日本を諒解する様になる。一年の後には日韓親善の立派な收穫を見るであらう。五郎は其れに益々熱中した。併し順潮ばかりが永く續かなかつた。或時日本人と村民との間に大衝突が起つた。

五郎は汽車に乗つて旅行した時に慙ういふ光景を見た。十二三歳の日本兒童が鞆を肩にして學帽を被て車室に入つて來た。満員の事とて腰を掛けへき餘地がない。子供は周圍を見廻した。丁度眼前に一人の肥大なる朝鮮人が長い髻を生やして悠然と構へて居た。子供は直此の男の肩に手を掛けた。

「おいヨボ其處を退け」

肥大先生は髻を片手で扱きながら恨めしさうに子供を見上げた。

「退かんかヨボ」と子供は叫んだ。先生は黙つて苦笑した。而してそこへ席を譲つて通路にべたんこに坐り、もう一度髻を撫でた。

「亡國の民ほど氣の毒なものはない」と五郎は思つた。其れと似寄の事件が始まつた。

百姓の一人が牛を繋いで野草を刈つて居た。繩が解けて牛はのこ／＼歩き出した。百姓は其れを知らなかつた。と牛は散々方々を食ひ盡して破垣の隙から日本人の島へ入り、其處に坐り込んで舌なめづりをして居た。其れを見た日本人は好き獲物御參なれと牛を牽いて自分の牛小屋に繋いでしまつた。一方百姓は牛が居ないのに氣が付いて方々探し廻つたが解らない。若しやと思つて日本人の家を探ねると、牛は來て居る。併し私の島に來て荒し廻つたから返す事が出来ない。つまり損害賠償として牛を沒收するものなり左様心得ろと嚴命した。百姓に取つては牛が生命の綱である。左様心得ては居られぬ。そこで百方歎願した。

「そんなに困るなら返してやる、其の代りお前は向ふ十五日間無賃で私の島の仕事をしろ」と日本人は言つた。百姓は其れに應じた。

農場と村の共有地の境界は短い垣や、單に石を並べてあるに過ぎぬ。のみならず牛は無心である。日本と朝鮮の見分が付くべき筈がない。一步踏み入れた許りで日韓の大問題にならうとは什麼して思へやう。

牛が踏み入つた許りで村民は二週間ロハで働かねばならなくなつた。恙う云ふ事が屢々ある事とて何人も怪しまなかつた。元來移民若くは新領土開拓の人と云へば大抵粗雑な無鐵砲な頭を有つてる者か日本内地を食ひ詰めた浪人である。彼等の眼には日本の國威伸張もなければ信用の尊重もない。只だ自分ばかりが金を儲ければ可いのである。此等の慥悍な人間共が朝鮮に入込んで暴れ廻つた事は殆んど筆紙に盡し難い。併合創業の際とて總督府は微細な點にまで手が届きかねる。漸く整理が着きかけた頃は、既に彼等浮浪人が大略暴れ廻つた後である。更に甚しきは高利貸である。朝鮮人は金を愛する事支那人と同様で、銀貨や金貨を見ると嬰兒が乳房を見る様に喜ぶ、此の弱點に乗じて彼等は恙う言ふ。

「お前共は田地や家屋を有つて居ると皆日本の政府に没收されてしまふから今の中に金に替へて置け」

韓民は直に是に應ずる。特に又恙ういふのがある。

「私の手に預けて置けば大丈夫だから私の名義に書替へて置け其の代りに私は五十圓をお前に貸してやるから、入川の際は五十圓の元利を返せば田地を返してやる」

此の口車に乗せられて、僅かに五十圓の銀貨で十町や二十町の田地を抵當流れにされるものは極めて多い。

智慧あるものは無智なものを慢るは猶ほ恕すべしとするも、一步を進めて無智なものを陥れ、赤兒に唐辛子を食はせる様な事をするに至つては決して恕すべきものでない。米國人が日本を誣ひて残忍な國、掠奪的な國、弱者を虐待する國と言ひ廻るが、并は政府當局の罪といふよりも是れ等浮浪人の罪が極めて多い。一頭の牛の粗忽から十五日間の使役に供せられた村人の不平は其れから其れへと傳はつた。是を聞いた米國宣教師ハリスは教會に於て熱烈な日本攻撃を始めた。

「日本人は凡て其れである。今にお前達は外へ出て歩く事が出来なくなるだらう。お前達の沓の泥が日本人の着初に跳ねた場合にお前達は其の賠償として十五日間の労働を課せられるだらう。お前達の妻も子供もやがては日本人の奴隷にされるだらう」
此の説教は村民を激昂せしめた。同時にハリスは此の事件を吹聴するために村に出張して戸別を訪問した。

「私の教會へ来い。米國はお前達を救ふ本當の友達だ」

此の影響が直五郎に及んだ。集會の人が次第々々に減り出した。

或日五郎は村の辻でハリスに會つた。ハリスは今村民に取巻かれて日本の暴狀を罵りつて居たのだ。

「君は愚民を煽動するののか」と五郎は赫として怒鳴つた。

「貴方は誰ですか」と丈高きハリスは五郎を見て言つた。五郎の高さはハリスに劣らなかつたので村人は此の二人の巨人を興味を以て睥睨した。

「僕は日本人だ。秋山武男といふ者だ」と五郎は巧に英語で言つたので村民共は驚きの眼を輝

かした。

「私は煽動をしません。神の教へを説いてるのです」とハリスは言つた。

「馬鹿言へ、聖書には人を憎み人を呪ふたりする事は書いてない筈だ。君はなぜ日本の悪口を流布するのだ」

「凡て神の心に逆らふものは悪魔として排斥しなければなりません」

「日本の國家を中傷して韓民を迷はすものは悪魔でないと云ふのか」と五郎は大喝した。

七

日米の喧嘩があるといふので村民は雲の如く集まつた。どうせ懶惰の民である。彼等は蹴を捨て煙管を啣へながら遠卷に二人を圍んだ。

「私は韓民を迷はすと言ふのですか」とハリスは言つた。

「金を以て村民を誘惑するのは何だ」と五郎が言つた。

「日本は武力を以て韓國を併呑しました」とハリスが言ふ。

「併呑ぢやない。救ふたのだ」

「私も誘惑ぢやありません。救ひに来たのです」

「枝葉の論は止したまへ」と五郎は急ぎ込んだ。「此に簡単な結論がある。君は其のポケットから金貨を出して僕の顔に打つつけるが可い。僕は此の拳骨を以て君の横頬を御見舞申す。痛い、感じたものが負として、負たものは今日から此の村に足を踏み入れない事にしやうぢやないか」

「怒う言つて五郎は拳骨を高く擧げた。ハリスの顔は見る／＼蒼くなり又赤くなつた。

「よろしい」と彼は言つた。「私は貴方を打つ事は出来ない。貴方は打つが可い。好きなだけ打つが可い」

彼は驚の様な鼻を五郎の前に突出した。

「一オツ」と五郎は其の頬を打つた。ハリスはびくりと首を縮めた時、日本派の百姓がどつと笑つた。

「二アツ、三ツ、四ツ……」

續けさまに亂打したのでハリスの右の頬は見る／＼腫上つた。併し彼は顔を引かなかつた。

「負たか」と五郎は言つた。

「いや負ません。負ると此の村へ来る事が出来なくなりますから」とハリスは言つた。

「行け」と五郎は舌打をして言つた。

「勝負は？」

「なしだ」

「私が勝ちました」とハリスは言つた。

「なぜ？」

「貴方が私を打つ事が出来なくなつたからです」

「何を」

「ではもつとお打ちなさい」

「もう可い」と五郎は横を向いた。村民の大部分は此の模様を見て五郎の勝利と判じた。而して一様に喝采した。

「そこで私は貴方に言ふ事があります」とハリスは頬に手巾を當て苦痛を祓へて言った。

「何だ」

「私を打つた時の心持は何ですか。牛を取られた百姓よりも牛を取つた日本人の心持は何ですか」

「牛の事なんか俺が知るかい」

五郎は憤然として立去つた。百姓共は前後に従つた。丁度其處の柳の枝から轉がり落ちた者がある。百姓は又た喝采した。其れは牛を取られた百姓で柳に攀じ登つて見物して居たのであつた。

五郎が五六間ばかり揚々と歩き出した。不圖返るとハリスが獨り頬を抑へながら夕日に向つて歩く姿が見えた。ひよろ長い影法師が地上に映つて居た。向ふの縁の高梁の若芽島の上に赤い煉瓦の洋館が夕日に輝いて居た。

「先生は強い豪いもんだ」と金公が傍に寄つて賞めそやした。

五郎の心は急に暗くなつた。

「あの毛唐人は俺より豪い」と彼は肚の中で言た。「いくら撲つても黙つて居た。撲らるゝ痛さよりも村へ傳道する事が出来ない事が餘程苦痛だと見える。彼奴はあの根氣を以て韓民を日本から引離さうとして居るんだから堪らない。これは實に由々しき大事だ」

八

五郎は直ぐ其足で東洋牧場を訪ねた。いかにも垣根といふは單に石を置いた許りである。是では牛が入り込むも無理がない。慙う思ひつゝ、苗島の畦を傳つて行くと其處に一人の男が蹠を以て島を掘つて居た。五郎は直其れは片腕の不自由な人間だと解つた。左の手はほんの添ものにしたきりで右の手ばかりで蹠を動かすので恰ら自分の足先を覗つて掘つて居る様に見える。

「お前は手が不自由なのか」と五郎は訊ねた。「俺の手が不自由であらうと無からうとお前さんの知つた事か」と男は嚙み付く様に韓語で答へた。

「氣の毒だと思つたから言たままでの事さ。そんなに怒るものでないよ」と五郎は餘りの無愛想に驚きつゝも優しく言た。

「氣の毒といふ事が日本人にありますかね。人の牛を没収けて手の不自由なものを口で使ふなんて……」

「牛を取られたのはお前か」

「へん」と男は忌々しさうに横を向いた。

「其れでは先刻柳の木から落ちたのはお前だね」

「俺が落ちたのが可笑しいんですかへ、可笑しければ笑ふが可い。男は益々ぶりくして言った。男といふより寧ろ爺といふが可い。最早や六十に近いだらう、鼻がけつそりと瘦せて眼ばかりが大きく、そして下唇は疲れた様に弛んで居る。

「お前さんは幸福だ。先刻の米國人は一番温和しい牧師さんだから無事に済んだのだ。他の米國人ならお前さんの眼玉が飛び出す處だった。俺はお前さんが酷い目に逢はされ、ば可いと祈つて居た」

「何だつて其那に僕を呪ふのだ」

「日本人は泥棒だ。此方が弱いから仕方がないが、今に李大人が來たら屹度此の恨を返してや

る」

「李大人とは誰だ」

「李大人を知らないのか、俺達の將軍だ。李成民といふ豪い人だ、人ぢやない神様だ」

「何を言つてるんだ。そんな事を考へずに本當にお前も日本人になつたらどうか」

「牛を盗む國とは一緒になれねえ」と爺は苦しげに叫んで「俺に孫娘がなけれや總督府の門で首を吊て死んで見せるのだが、俺が死んだら柳小が困るし、牛を取られても働かねばならねえ牛が無けれや片手で什麼する事も出来ないんだ」

「孫があるのか」と五郎が言つた。

「戸籍調べをして何になるね」と爺は舌打して蹶をがたく振ふた時、片手はだらりと袖の中に垂れて居た。と此時石垣の外から爺を呼ぶ聲がする。

「おう」と爺は答へた。而して急ににこやかな顔になつて「此處へ来いよう」

垣の外に十六七の小娘が青い汚い朝鮮服を着て茶色の布で頬冠した額の下から悪い眼を光りして疑ひ深く五郎を見詰めて居た。

「恐くはない、此處へ来い」と爺は再び言った。娘は直に垣を踏えて跳り込んだ。其れは跣足である。青い服は處ろく、黒や赤や緑色の異つた布で破れを綴つてあるが、首も手足も泥だらけで、而も荊に裂かれた様な疵が数限りもなくあつた。足の爪は二本とも布で纏帯して其處から泥と共に血の色が滲んで居る。彼女は衣匣から二つ三つの芋を取出した。そして一本を爺にやつて自分は一本を皮のまゝ、ガリガリと嚙つた。

「掘て来たのか」と爺は言った。

「貰つた」と娘は言った。そしてふつと芋の皮を口から吐いた。

「さあ替りませう」と娘は言った。

「うむ、少しばかりだよ」

娘は残つた芋を衣匣に入れて爺に代つて鎌を取つた。

九

「片輪の祖父に代つて働きに来たのだ」と五郎は思った。彼は何とも言へぬ憤慨に満たされた

東洋農場なるもの、不法のために此の衰れた祖父と孫とが如何に苦しみつゝあるか、此の不法が纏て韓民の不平となり米人の中傷となるのである。

彼は黙つて其處を去つた。煉瓦や亜鉛や瓦や極めて不統一な建物の色彩が夕日に輝いて居る。それは農場の事務所である彼は直管理人に面會を求めた。

「管理人といふのではないが、私は大體に就て御話を伺ふだけの事は出来ます」と頭を綺麗に分けた、顔の圓い若い男が入口の階段の上に立つて五郎を見下しながら言った。

「他の用事でもありません。此の村の百姓の牛が常農場へ紛れ込んだので其の牛を貴方が保管してあるさうですが、定めし飼主が御解りにならないから預かつて居られるのだらうと思ひます。併し飼主が解りましたからどうか本人に御渡しを願ひたいのです」

「はあ其の御用ですか、其れなら既に當方に於ても飼主が解つて居ますよ」

「では飼主に御返し下さいましたか」

「いや、少しく事情があつて私の方へ繋いであります」

「牛の使用料を御拂ひなさるつもりなんですね」

「いや、それは決まつて居りません」
 「では當人に無斷ですな」と五郎は少しく興奮して言つた。事務員はちよつと舌打して「其の御用なら明日にしてくれませんか、今日は當農場の所長が東京から見えまして、少しごたくして居ますから」

「いや明日までも御待ちする事は出来ません。牛は百姓の一日も缺くべからざるものです。それを貴方が横奪して百姓を苦しめるとは怪しからん事です」

「何が怪しからん事だ」と事務員の瀧田は恫喝的に怒鳴つた。其の聲は粗造の建物に響いたので瀧田は自分ながら偉大なる聲が出たと思つた。そして相手がこれで凹垂れるだらうと豫想した。だが五郎は少しも怯まなかつた。

「おい、お前は人間か」と五郎は靜かに言つた。

「日本人か、おい、腕力で來るなら望む處だよ」

「お前は朝鮮人から鼻薬を貰つて脅迫に來たのだな」と瀧田は又も叫んだ。同時に五郎の手は其の首筋に掛つた。瀧田は機械の如くばかりと倒れる。其處に捨て、ある繩切を取て五郎は直

ぐ後ろ手に縛りあげた。

「何をすると瀧田はぼた／＼して言た。「おい誰か來てくれ、強盗だ」

聲を聞いて奥からぞろ／＼日本人が出て來た。

「強盗？」

「やつてしまへ／＼」

棍棒やら洋杖やら手ん手に振り翳して五郎を圍んだ。

「僕に手を下したら此の男の生命が無いぞ」恚う言て五郎は膝の下に敷いた瀧田の喉骨に楯指を當てた。

「あ、／＼死ぬ／＼」と瀧田は唸つた。群集は手を下す事も出來ずに立往生して居る。

「警察へ／＼」と一人が言た。

「憲兵を／＼」と一人が言た。

「所長、中々圖々しい強盗ですよ」

「強盗は大抵圖々しいものだよ」と所長と呼ばれた男が言た。其の聲に五郎はふいと顔を上げ

たし

「やあ奥田」

「おう」と所長は仰天したが直ぐ黙つてしまつた。

「富男君、この農場は貴様のものか」

10

「何を言ふんだ」と富男は苦笑して「おい誰か早く憲兵を呼んで来い」

「おい僕だよ、僕を知らんか」と五郎は富男に念を押す様に言つた。

「さあ誰だつたか、私は強盗に近付を有たん」

「いやどうも呆れた奴だ」と支配人らしい男が言つた。

「可しッ、其れなら其れで可い」と五郎は瀧田を曳いたまゝ、立上つた。

「さあ牛小舎へ案内しろ、おい奥田、百姓の牛を盗んで、百姓をロハで使役した賠償に僕はお前の牛を持つて行く、其れが不服なら警察へ訴へるが可い。さあ歩け」

歩かなければ絞め殺されるので瀧田はのこく、歩き出した。牛小舎には數十頭の牛が群がつて居た。

「百姓の牛は何れだ」

五郎は百姓の牛と今ま一頭の最も肥大な牛を曳出さした。而して一頭に瀧田を括り付け自ら一頭を牽いて悠々と立去つた。島の處へ来ると例の百姓と孫娘が蹶を洗ひかけて居た。

「おいお前の牛を取返して来たぞ」と五郎は言つた。百姓と娘は眼を圓くして五郎と牛を交り交りに睨めた。

「さあ連れて行け、これはお前の所有だ。其れからお前が今日まで何日働いた」

「十日です」と百姓は答へた。

「十日間の手間賃と牛の使用料と其れに依つて受けた損害賠償として此の牛をお前に與るからこれも連れて行け」

「此の大きな牛を？」と百姓は先刻の無愛想に引替へて急に元氣づいて言つた。娘はもう嬉しうに自分の赤牛の傍に寄つて其の頭を撫で、居た。

「二頭ともお前の所有だ」

「難有う」と百姓はそわ／＼して幾度となく叩頭したが、聽て縛られてある瀧田を見て吃驚した。

「此の人は？」

「これは今までお前をロハで使つたから今日からお前が此の男をロハで使つてやれ」

「面白く」と百姓は躍り上つた。「朝五時から夜の八時まで引叩いて使つてやりませう」

「おい冗戯ぢやないぞ、俺を誰だと思ふ」と瀧田は牛の上でばた／＼して怒鳴つた。

「誰でも構はない。日本人から許しが出たのだからお前さんは今日から私の人夫になるんだ」

「助けてくれえ」と瀧田は泣聲で叫んだ。五郎は黙つて笑つて居た。

「さあ家へ歸らう」と百姓は蹶を擔いで「柳小よ、家には一頭分の小屋より外にないから此の

牛と此の人は今夜外に繋いで夜露に當て、置かう」

「其れが可いわ」と柳小は言つた。而して瀧田が落した靴を拾つて自分の足に穿いた。

「さあ行け」と五郎は面白半分に急ぎ立てた。

「よう、叱い／＼」と柳小は赤牛の尻を叩いた。牛は嬉しさうに歩き出した。續いて爺は大きな黒牛の尻を叩いた。

「助けて／＼」と瀧田は右に左に悶搔きながら逆になつた舟の様に兩足と頭だけを天に突出して曳かれて行く。

「おい、君も日本人ぢやないか」と瀧田は弱々しい聲で五郎に言つた。「朝鮮人に侮辱さすといふのは愛國心が無さ過るよ」

「愛國心があるから君の様なものを懲らすのだ。日本の威信を傷つけるのは君等の様な奴等だ」

「そんな事を言はずと何とかしてくれ給へ」

「僕は知らんよ」

五郎は途中で三人に別れた。

五郎は嬉しさが充満であつた。何といふ事なしに元氣が身體中に溢れて居る。日は既に暮た

が、春の夕暮は未だ明るい。薄紫の夕焼の雲が野面を微かに染めて細い、新月があるか無きかの光をうつとりと抛て居る。

「腕力に限る」と彼は獨りで言つた。無制裁の社會を矯正するには腕力を以てするより他に道がないのだ。

今日は米國人と戦ひ又た日本人と戦ひ兩度ながら勝利を占めた。議論は時間を空費するが腕力は直に終結する。これほど簡單なものはない。

「僕は宗旨を代へて腕力主義になるんだ」

怒う考へると同時に彼は瀧田が今頃どうしてるだらうと思ふた。そして可愛さうにもあり又痛快でもあつた。

「奥田の奴が、所長だとは知らなかつた。場合に依つたらあの農場を没收して此の村の共有にしてやらう」

いろ／＼な希望や計畫が立ち處に湧いて来る。農場を占領して村民と共に經營する。而うして本當に日韓合併の實を擧げる。

晩春の朝鮮は風暖かく雲美しく空氣が鮮明で凡ての感じが物和かである。彼はゆつくり／＼歩いて家に歸つたのは既に八時過であつた。

「先生、た、た、大變だ」と金公は慌て、出迎へた。

「何が」

「憲兵が來ました」

「憲兵だつて來るだらう」

「直ぐ役所へ出頭しろ、隠れると承知せんぞと言つて……」

「うむ、牛の一件だらう。お前は何をしてるんだ」

金公は既に自分の荷物だけを丸めて逃げ支度をして居たのであつた。

「大丈夫ですかね」

「大丈夫だよ」

漸と安心して金公は食事に取掛つた。五郎は空腹にした、か詰め込んで其れから今一度彼の百姓を訪ね、瀧田を宥してやらうと家を出やうとする途端、佩劍が靴に當る音が聞えた。

「おいお前は秋山武男か」

「爾だ」と五郎は傲然と答へて「おい憲兵か警官が知らんが、人に對するには相當の言葉を使ふが可いよ」

「御用だ」と憲兵の一人が言つた次の一人が秋山の手首を握つた。

「何の用だ」

「お前は牛を強盗した」

「あ、あれか」と五郎はにやりと笑つて「うむ、一緒に行くから安心するが可い」

五郎は黙つて縛に就いた。何となく滑稽で面白くて小説めいた事だと思つた。

役所の取調が始まつた。五郎は一伍一什を語つた。彼は飽くまでも自分の行爲は正當な事だ

不正な日本人を懲らして村民の信用を得る事は日本政府の施政方針を助くる一端であるのだから、仔細を物語れば署長も警官も必ず自分に感服して同時に東洋農場を誹責するだらうと信じ

て居た。だが事實は全然それと反對であつた。

「お前は強盗だ」と警官が言ふ。五郎は殆んど不可思議な感じがした。

「どうして強盗ですか」

「人を脅喝するのみならず捕縛までして牛を盗んだのは強盗ぢやないか」

「其れは違ひます。強盗は寧ろ東洋農場です。牛を没收し百姓をロハで使用しました。だから

僕は其の牛を返さしてやつたのです。そしてその損害賠償として他の牛と灌田を百姓にやつたのです」

「なぜそんな事をした」

「そうしなければ日本の信用を損するからです」

「いや、お前は強盗だ」と警官は怒鳴た。

一一一

五郎は實に不思議で堪まらなかつた。愆くまで事情明白である事が什麼して愆うも曲解するのだらう。

「強奪されたものを奪ひ返すのが強盗ですか」と五郎は言つた。

「腕力を以て他人の財産を奪つた」

「他人の財産ぢやないのです。それは百姓から盗んだものです」

「盗んだものぢやない。當人の承諾を得て預かつてるものだ」

「考へて御覽なさい。誰が好んで牛を他人に與へ、ロハで二週間も働く者がありますか」

「ロハでない。金は拂つてある」

「なるほど、今夜急に拂つてやつたのだな」と五郎は覺つた。

「併し牛は百姓のものです。牛の損害は牛を以て償ふべしです」

「お前は百姓に頼まれたのか」

「頼まれはしません。只だ人道の上に於て見るに忍びないからです」

「お前は人道を説く資格があるか」

「警官は人道を説く資格がありますか」

「何を？」と警官は眞赤になつた。

「警官に資格があれば僕にも資格があります」

「お前は米國人を脅迫したらう。金品を横奪しやうとしたが果さざる處からして米國人を毆打して傷を負はしたらう」

「そんな考へは一體何處から出るんです」と五郎は噴飯して言つた。「實に滑稽だ」

「滑稽とは何だ」

「白晝に米國人から金を強奪するなんて其那事が出来ると思ひますか」

「通常の人には出来ないが、お前には出来る。これを稱して強盜と言ふ」

言葉の綾が氣に入つたと見えて警官は自分で再び繰返した。

「そうだ、強盜人種は特別であるぞ」

「僕が強盜人種です」

「爾だ」

五郎は餘りの事に言葉が出なかつた。

「一體今の總督は誰ですか」

「それを聞いて何になるかッ」

「いや参考のために聞きたいのです。楠侯爵が今も猶ほ總督ですか」

「侯爵は總督だ」

「あ、侯爵も可愛さうだな」と五郎は嘆息した。

「何を言ふか」

「貴方は侯爵の意志を御存知ない」

「黙れ、重罪犯の癖に」

「一體僕は什麼なるんですか」

「私は知らん。それをお前に知らしむるものは法律といふものだ」

「憚う言つて警官は五郎を留置所へ抛り込む様に部長に命じた。」

「満員ですが」と憲兵は言つた。

「満員でも構はん」と警官は言つた。

「五號室は如何でせう」

「五號は？」

「永梅吉が居ます」

「はあ彼奴か。彼れは困るが……併し一晩だけは可いだらう。明日になつたら空室が出来るかも知らん。上等の空間が」と警官は皮肉に笑つて「併し氣を付けてね」

五郎は留置場へ案内された。

「面白いものだ」と五郎は思つた。眞面目に考へると耻辱でもあり腹立たしくもあるが、彼は餘りの突飛な格事に、どうしても眞面目には考へられなかつた。而うして今留置場へ入れられるのは自分ではなくして他人である様な氣がした。

一三

五郎は生れて初めて警察の拘留所なるものを見た。漆喰で固めた地の上に二側に室が並んである。どれも丸太棒の様な頑固な木材で全部の板張の眞中に五寸四方ばかりの穴がある。其れは窓とは言へない……此の穴から囚人が用事のある時ものを言ふので、又た警官の方では此の穴から囚人の動靜を窺ふのである。出入口は門を徹した鐵錠付の三尺許りの潜り戸で

ある。

五郎が曳かれて室の前を通つた時、穴の中からいくつもく退屈さうな顔が覗いた。其れは如何にも同情する様な、又新入の友達を歓迎する様に見えた。

「變な處だ」と五郎は思った。五郎の入れられた五號室は他と同じものであつた。只中は疊の数が三疊敷位で、これは一番小さな室である。内部は板ばかりで天井が馬鹿に高い、空氣の通ふ處は只だ例の穴ばかりで、隅の柱の上に暗い電燈が點つて居た。巡查ががたと錠を下して去つた時彼は初めて是れでなく、自由の身體でなくなつた様な氣がした。

彼は室の真中に一人の男が寢て居るのを見た。年の頃は四十許でひよろ／＼と瘦せた長い脛を壁板に突張つて眠つて居る。彼は五郎が入つたのを見たが見向きもしなかつた。そして大きな欠伸をして又た眠りかけたが、廳でむく／＼と起直つた。

「お前さんは氣の毒だけれども隅の方に坐つてくれ、私が窮屈だから」と彼の男は朝鮮語で言つた。

「お前が窮屈なら僕も窮屈だ。自分勝手な事を言ふない」と五郎も朝鮮語で言つた。男はむかむ

かと腹立たしさうに眼をぎろぎろ光らして「お前は何處の者だ」

「僕は日本人だ」と五郎は言つた。

「あ、爾か。其れでは敬意を表して半分づゝにしやう」と男は至極達者な日本語で言つた。五郎は吃驚して「君も日本人か」

「いや私は朝鮮人だ。これでも京城子だ」

「日本に居たのか」

「ちよいとね。これでも明大の卒業生さ」

「ふん、爾か。僕は帝大だよ」

「これは實に可い知己を得た」と男は快然として「只今は失禮しました」

「なに構はないよ」

「何科ですか君」

「僕は文科だ」

「はあ、其れは洒落て居ますね」

「君は？」

「五年も東京に居て法律をやつたけれども、國亡んで山河ありといふ風では何も駄目ですからね。眞面目に世渡りをする氣になれませんか。何しろ朝鮮人も段々滅ぼされてゆく許りでせう。丁度島の菜を間引く様なものでせう。國といふのは名ばかりでせう。税金は取られるけれども選舉權がない。學問をしても博士にはなれない。郡長は名ばかりで實際の政治は日本人の書記官が執つて居る。これでは人民としての資格がありませんや。まあ其那事は什麼でも可いや、僕もね、悲憤慷慨もしたけれども國の無いものが何をしたつて駄目なでせう。これが日本が滅ぼしたと云ふでなしさ、つまり朝鮮が意氣地が無さ過るんでせう。東京には今私の國の元老で宋丙根といふ爺さんが居るつもりです。別荘を有てさ、結構だ。日本の新聞では偉大な人物として賞て居ますがね、そりや日本人が賞る筈ですよ。自分の國の事なんか些とも構はずに自分だけがかつさつと日本に籍を入れてしまつたのですものね、利巧だ。實に利巧でさあ、そんな事を思ふと私は何にもする氣になれなくなる。そこでよろしく遊んでさ。君は遊んで食へる法を知つて居ますか」

一四

假令ば相手欲しさに焦れて居たといふ風に男は一瀟千里に饒舌り續ける。

「えつ？遊んで食へる法を」

「それは知らない」と五郎は笑つた。

「傳授をませう。錢が無くなつて飯が食へなくなつたら何か一つ犯罪をやるんですな」

「犯罪？」

「喧嘩でも小泥棒でも巡查に突掛るんでも但しは社會主義の演説をやるんでも何でも可いであるべく憲兵に見付かる様にやるんです。すると警察へ拘引される。三度の御飯が口ハで食へますさ、おまけに働く事もなし少し窮屈だけれどもごろ／＼寢轉んでれば可いんですからね。なる程名案だ」

「でせう。だから僕なんか十日に一遍位は此の方法をやるんでさあ。これでも昔はハイカーで日本に留學したのだけれども、學問も何も要らないんですからね。親があればこそ孝行もしや

うし、國があればこそ學問もするんだ。やあこれは脱線しました。憤慨するんぢやなかつた。兎も角も僕はね、曾日駐在所の時計を盗む振をしましたよ。その時に十日の拘留でした。次には酒も飲まずに酔つた振をして車に乗つて人を倒しましたよそれは示談にされて只三日でした。京城では僕の此を法を看破されたので警察でも拘留してくれませんか。そこで今度平壤へやつて来たので昨日は當地での試運転でした。大道で演説をやりました。我輩は社會主義者なり暴動の煽動者なり過激派の首領なり婦人國有論者なりと怒鳴つて居ましたら果して警官が引りましたよ。これで當分食へまさあ。何しろね直ぐ是免になると困るから警官の前へ出ることに氣骸を吐くのです。併し氣骸も餘り吐き過ると失敗しますよ此の前に鎮南浦で僕は吾れは豫言者なりと言ひましたら此の男は狂人だと言つて一膳の飯も食はない中に放免されました。「不思議な商賣もあるものだね」と五郎はつくづく感服して言つた。「死ねば國葬でせう。大臣待遇でんでね」と男は益々興に乗じて「一つ見て御覽なさい」怒う言つて彼は高らかに都々逸を唄ひ出した。「都々逸あ下手でもやりくりや上手テットン、あゝこりやく〜」

唄ひ終らぬ中に靴の音が聞えた。

「おい永梅吉、何をしとるか」

「御聞きになつたら解るでせう。これは貴方方の國語です」
「静かにせい」

「はい」

「巡查が去つた後で彼はべろりと舌を出して又唄つた。

「今のドンガラガンは何處から流行つたドンガラガン」

「おい〜」と巡查は駈け付けて「永梅吉」

「琉球へおじやるなら草鞋穿いて……」

「こらッ永梅吉」

「私は永梅吉ですかね」と男は言つた。

「偽名を申したのぢやな」

「左様で」

「本名は何といふ」

「さあ何と言つたら可いでせう。その處はよろしくね」

「不埒な奴だ。此處へ出ろ」

「へえ」

永梅吉は顔を潜戸から出すや否やびしやりと続けさまに顔を打たれた。

「哀號々々」と彼は朝鮮語で言つた。

「よし貴様は中々放免してやらんぞ」

「巡査はぶつ／＼言つて去つた。」

「御覽なさい。當分食へますよ」と彼は痛い頬を擦つて言つた。

一五

不思議な男と同房になつたので五郎は殆ど牢獄にあるを忘れた。永梅吉は其の半ば自暴的な口調で種々な事を語つた。其れに依ると日本の總督府や商人や會社員や浮浪人が如何に韓民を

輕蔑し壓迫したかに就て巨細に知る事が出来た。

「ねえ君」と永梅吉は續けた。「若し米國人が日本國民を奴隸の如く取扱ひ其の生活の安全をも害したなら日本國民は何と言ふだらう。日本だつてベルリの條約の時に、ベルリが今の日本政府の様にどし／＼手酷く迫害を如へたら日本人は決して黙つて居やしまし。文明の程度から言へば當時の日本は丁度今の韓國の様なものだ。米國が大砲の筒先で日本を潰すには赤兒の手を振るよりも世話が要らなかつたのだ。それでも米國ではそんな亂暴な事をせずに、飽くまでも日本に同情を有つて、駄々つ子を賺す様にして文明に導いてやつたぢやないか。其れが先進國の義務といふものだ。然るに日本は韓國を取るや否や、英國が印度を取つた時よりも酷い事をする。其れが文明國の態度だらうか。日本人は日支親善など言も東亞聯盟など言ふが、現在韓國を虐けてるのを見たら、いくら鈍感な支那人でも恐れずには居られないよ。だから韓國人は悉く反感を有つて居るのだ。氣の利いた奴は大抵間島に隠れてるよ。間島は支那の領地だからね、そこには日本の警察が手の出しやうもないさ。日本から言ふと不逞の韓民が其處に埋伏して上海との聯絡を取つて暴動を計畫してゐるのだ。それも馬鹿々々しい事だ。朝鮮が米國の

ものにならうと日本のものにならうと結局は同じ事だからな。何も暴動を起すの必要もない譯さ、國は誰のものだつて構やしない。俺の様に飯を食つて生きてれば可いんだからな。あ、長いお饒舌をしたので草臥れた。さあ寝やう。扱以下次號だ。

言ふだけ言うて永梅吉はころりと横になつたかと思ふと扉が聞えた。

五郎は眠られなかつた。永梅吉の言ふ處に一理ある。併し國はどうでも生きさへすれば可いのだといふ點に就ては五郎の肚の虫が承知しなかつた。

「故郷や國家に愛着のない者は氣樂に違ひない。併し其れは動物的だ」

彼は一概にそれを否定した。が同時にもう少し考へて見たい様な氣がした。

「國は何故必要なのだらう。一個の人間として生存するには籍が英でも米でも日でも同じ譯なんだ。それを何故自分の國を愛し自分の國を護りそのために戦争をして生命まで捨てるんだらう。敵が押寄せて来れば國を明渡して住みよい土地に移ればそれで済むのだ」

忠君と言ひ愛國と言ひ、子供の時から學校で吹き込まれた教義の根本を今の今まで考へた事になかつた。五郎ははたと當惑した。

若し日本の國風の様、人民は忠君愛國でなければならぬものとすれば、僕の如きものは什麼すれば可いのだらう。僕は朝鮮人の子で日本人に育てられたのだ。僕の血は朝鮮人で肉は日本人だ。

日本が凡ての國と異つて居る點は、皇室と人民と親子一體の關係がある事だ。皇室は親で人民は悉く其れから生れた事になつて居る。即ち一大家族である。だから皇室には忠であり國家には愛である事が出来る。然るに朝鮮は其れと異つて居る。王室と人民に血族の縁がない。僕が日本人であるなら、日本人らしく忠君愛國でありたい。併し僕は日本でない。然らば僕の君とする人は何人か、僕の國とする處は何地か、何れにも屬せぬとすれば僕は此に眠つて居る放浪者と同一の放浪者に過ぎないのだ。

それでは満足が出来ぬ。

一六

五郎の頭が熱した。放浪者となつて一生を送る事が出来るなら何の苦勞もない譯だが、彼は

什麼してもその氣にはなれない。

「一體僕は何方を愛してるのだ」と彼は自分に問うて見た。

「日本を」と肚の中で答へた。

「それなら其れで可い筈だが、なぜこんな苦悶をするんだらう」と再び問ふた。

「韓人の子だから」と肚の蟲が又も答へた。

「それなら兩方を愛すれば可いのになぜ愛し得ないのだ」

是に對して答ふるものがなかつた。彼は疲れて眠つた。翌日警部が取調べるかと待つて居たが何の沙汰もなかつた。其翌日も、翌々日も、今まで平氣であつた五郎も三日も四日も拘留所に幽閉されたので段々焦れ出して來た。

「早く裁判所へ廻すなら廻してくれ」と彼は巡查に言つた。巡查はにや／＼と笑つて何も答へなかつた。

「君は仕合せだよ」と永梅吉が言つた。「何もせんでもいつまでも食つて居られるからね。僕なんか、三日に一度位何か亂暴をやらかさんと直ぐ放免になるからね」

いつまでも拘留されて居たい永梅吉と早く自由になりたい五郎とは無論立場が異つて居る。五郎は最早や辛抱がしきれなくなつた。

「いつそ破獄をしてやらうか」と彼は思つた。

「僕は日本のために正しい事をしてやつたのだ。然るに警察が僕を監禁する。これは柔順にして居るべき事ではない。一旦脱獄をして直接に裁判官に訴へるのが至當だ」

彼は慙う決心した。そこで彼は如何にして此の留置場を脱れるべきかに就て考へた。四方二重三重に圍んだ此の牢獄には手の付け様もない。寧ろ白晝に監督の巡查を撲り飛ばして脱走しやう。それより他には方法がない。彼は慙う決心した。

其れは雨が朝から降り注ぐ日であつた。牢獄の中は更に鬱陶しく臭氣が殆ど眩暈する様に激しく襲うて來る。

「今日だ」と彼は肚の中で首肯した。そこで彼は便所へ行くつもりで房を出た。巡查はその後姿を見送つて居たが、入口の扉は堅く鎖されて居る。よしんば巡查を倒しても扉を開ける事が出来なければ無効である。そこで第一に鍵の在所を知つて置く必要が生じた。彼は鍵が卓

子の抽出にあると見て取つた。そして黙つて房へ歸つた。一時間の後に又もや便所へ行かうとしたとして其の準備として彼は確乎と帯を締め直し、氣を靜めるために二三度深呼吸をした。「おい君」と永梅吉は突然五郎の手を握つた。

「待てくれ。おい」

「何を」と五郎はわざと平氣に言つた。

「君は脱獄をする積だらう」と永梅吉は小聲で言つた。

「どうして君は」と五郎は驚いて言つた。

「解つてるよ。昨日からの様子が變だ」

「何を言ふんだ」と五郎は笑つた。

「いや、待て、君の考へてる手段も大抵僕が想像して居る。がだそれは不可いぜ、君が巡査と格闘するか否や、向ひの房から探偵が出て君を捕まへる。わかつたか、先刻探偵が一人罪人に化けて向ひの房へ入つたのを僕が見た。彼奴が飛出して巡査に加勢したら君は無駄骨を折るだけだよ」

「爾か」と五郎は落膽して坐つた。

「それよりも君」と永梅吉は益々聲を潜めた。

「あと三日待ち給へ。可いか、三日目の夜半の二時には君が黙つて居ても出られる様になるから」

「どうしてだ」

「此の警察が焼けるよ君」

「恠う言つた永梅吉の眼は輝いた。」

一七

「警察が焼ける？」と五郎は益々驚いて言つた。

「うむ」

「どうして」

「それは爾いふ事になつてるんだよ。それだけ言つたら後は言へないのだ」

「いよ／＼御別れだ君」と永梅吉は五郎の手を握つて言た。「君には随分御世話になつたよ。だが君は正しい人だ。僕は必ず君を救ふから安心してくれ給へ。お別れ一言言つて行くが、僕は朝鮮人だ。君は日本人だ。敵と味方になるよな事があつても私だけは兄弟分になつてくれ給へ。若し因るよな事があつたら僕の先生の李成民を訪ねて来てくれ給へ。必ず君の助けになるから。左様なら兄弟三日の後にね。首尾能く行つたら水源まで来ればわかるよ。左様なら再び手を堅く握りしめた時再び巡査の聲がした。

「腹は未だか」

「少々癒りました」

「早く出る」

永梅吉が房を出ると巡査は軽く彼の肩を叩いた。

「おい、お前は放免になりさうだぞ」

「へえ」と永梅吉は驚いた風をして「書生さんとねえ、好きで苦勞をするぢやないが……」とホーカイ節を唄つて穴から覗く五郎に目禮しながら「親には勘當され學校落第し仕方がないか

らね、そら仕方がないからね……」と唄ひ續けながら其處を去た。

「陰謀者だ」と五郎は肚の中で思った。彼の胸は何とも言へぬ嚴肅な氣に満たされた。彼の眼は涙に濡れた。

「おい秋山武雄」といつの間にか巡査が窓から顔を出した。

「お前の本名は何だ」

「秋山武雄です」

「嘘を吐け、お前は朝鮮人だらう」

「何を言ふんです」

「永梅吉の相棒だらう」

「何を言ふんだか僕には解らん」

「おい永梅吉はお前にどんな話をしたか」

「いろ／＼な話をしたただけだよ」と五郎は尊大に言つた。

「何？可しッお前は確かに相棒だ」

降たかと思へば直ぐ霽れて濡れた椿の葉に日の光が美しい。晩春の懶さは金絲雀の聲も寂れて若葉の影に芽立つた植込の影濃やかに手水鉢の水に映つて居る。

晶子は鏡臺に向つて刷毛を取た。粉白粉をほとくと刷毛先に付けたが扱て其れを顔に塗らうともせず、其儘ぼんやりと庭の方を眺めた。

「身延山の御参りが通る」と庭の隅で母が誰かに言ふ聲が聞えた。いかにも團扇太鼓の音が手に取る如く聞えて、其れが段々に遠ざかると風のまにまに聞えたり聞えなくなつたりする。晶子は黙つて又た刷毛を取り上げた。雨後の日がうつすりと軒を掠めて、軒の影が判で押した様に窓の障子に映る。半ば開いた障子の間から晚咲の海棠が艶々しい色をして鏡の中を覗いて居

る。薄紅の抹した様な花瓣と鏡の光と晶子の白い顔が室の中に融け合つた。晶子は矢張ぼんやりして居る。頃日は何をやる張合もなく、草を見ても花を見ても天を見ても山を見ても只だ薄鼠色の心持である。泣くにも泣けず、人と話をする事さへ煩さくて、自分ながら生てるのか死んでるのが解らない。五郎に別れてから此に四月は過ぎた。父は既に箕面の別荘を人手に渡し、此の岩淵に移り住んで朝夕に富士の山を眺め富士川に釣を垂れて例の事件の決定を待てる。たつた半年の間に百年の波瀾が起つた。淀川銀行は潰れ家宅財産は失くなり、さしも豪華に時めいたものが今故舊の訪ね寄るものもなく、例の石尾傳八父子だけが何處までも従いて居るだけである。昔の賑やかさに引替へて今の淋しさ、猶ほその上に肝腎の五郎の行方が杳として解らない。

「せめて葉書一枚なりと送つて下されば可いのに」、彼女は今突然獨りで恚う言つた。はつと思つて四邊を見廻し臆て鼻の先を軽く刷毛で叩いたが直ぐ小篋の抽斗に藏ひ込んで、いかにも面倒臭いといふ風にぐつたりと兩手を疊に突いて低首れた。と軽く彼女の肩に手を置く人がある。

で居る。雪はいつの間にか舟の帆になつて廣々とした海になる。夕日に燃ゆる島々が見える。そこは朝鮮である。海岸に五郎が立て居る。直ぐに二人は一緒に歩く其れは箕面の紅葉の中である。

「おやどうしたんだらう。夢を見て居たのかしら」

彼女は慙う思つて自分の頭を明瞭させやうと外を見やる。外に春の光が溢れて居る。彼女が編物を續ける。一日彼女は例の如く窓際に立て編物をして居る。窓の前に若竹がすう／＼と二三本延びて其の間から父が石竹を植ゑ替へて居るのが見える。父の癖として大島の着物を着ながら畠を耕やす、泥いぢりをするので母は隣者の着る様な被布を作つて當てがった麥藁の大きな帽子を被つて着物の裾を引曳りながら黒い鉢に石竹を植ゑ替へては一つ／＼に並べる。其の度毎に胡麻鹽の交つた髭と日に焼けた腕とが見える。

「御父様も御年を召した事」

晶子は慙う思ひながら自分の幼時を憶ひ出した。運動會で五郎が競走の一等を取った時自分が未だ一年生で、一生懸命に五郎に應援したので皆が笑つた事や、父が莫大の寄附をしたので學

校で肩身が廣かつた事や、又しても空想が空想を生む。

「併しな、當人が厭だといふものを無理に勧める事はならんぜ」

「私も爾思ひましたから何も言ひませんでしたが、侯爵の御考へは奥田の方にあるらしいでございますから」

「どうして奥田がうまく侯爵を擒にしたんだらう」

隆二は鉢を目で數へながら腰を伸して夫人の松子を見やつた。松子は白いエブロンを肥つた身體に掛けて居るので其れが日光にきら／＼と光つた。

「却々如才がありませんからね。私の考へでは侯爵も何か御考へがある事だらうと思ひます」

「併し晶子が承知なら此上もない話だが、そうでない可可愛さうだ」

「でも私共の方で御断りしますと何だか無理に五郎の嫁にして侯爵家と親類になりたいかの様に思はれます」

「何と思つても構やせん。晶子が五郎をいつまでも待つと言ふなら仕方がない」
空想に耽つて居た晶子は自分の名を稱ばれたと思つて氣が付いた。

「御父様、御呼びになつて？」

「いや〜」と父は笑ひながら言つた。「そこまで聞えたか？」

「いゝえ。何だか私の名を御呼びになつた様な気が致しましたのよ」

「此處へ御出」と父は言つた。晶子は直に縁先から下駄を突掛けて父の傍へ行つた。

「石竹？」

「うむ、麝香撫子といふのは是れだ」

「あら快い香ですこと」と晶子は父に貰つた一つの花を鼻に當て、又頬に當てた。頬は日に照されて林檎の様に染まつて居た。

三

物思ふ身は何を見ても涙の種である。晶子は石竹の一莖を頭に挿て會て五郎と此の花の香に咽びながら When will you come again を唄つた事を憶ひ出した。

再び會ふべき時は何時か、开は長へに去つたのであるまいか、ジョンニーの悲しみと我が悲

しみは何れが深いだらう。

石竹は香ふ、日は輝く、晶子は眼を閉ぢて暮ゆく春の光に身を任せた。

「なあ晶子」と父は微笑して言つた。

「私が御前に訊きたい事がある」

「なあに？」と晶子は押へた様に言ふ。

「お前達の様な若い娘さんだね。而も新しい女の心持は私には解らんが、何かへ、一旦思ひ込んだ男があるとどうしても忘れられないものかへ」

「あら御父さん」と晶子は怒る様に言つて「私知りませんわ」

「うむ、知りませんわでは困るな。併し若い時には別に纏まつた考へがないのだから、つまり誰でも可いんだね。少しばかり厭な人でも夫婦になつてしまへば好になるからね」

「其れでは御父様、夫婦といふものではありませんわ」

「ぢや何だらう」

「同居人ですわ」

「はつ／＼／＼なるほど、氣の合はない夫婦は同居人か。なるほど、松子お前と私とは同居人だらうか」

「あらまあ」と松子夫人は肥つた圓い手を振様にして、「何ですまあ」

「御父様も御母様も本當の夫婦ですわ」

「爾か、模範的夫婦か」

「えい」と晶子も笑つた。濕り勝の晶子の顔に笑が浮かんで父も母も浮き／＼して來た。

「そこで晶子、何だつけな。おや話が混線してしまつた。てうツと、うむ爾だ。つまり心と心が合つたものでなければ夫婦でないといふわけだね。だが人生は儘にならない。どうしても夫婦になれない場合にはどうしたら可いだらう」

晶子は黙つて父の顔を見詰めた。

「御父様、私、お母様が初めて御父様の許へ被來つた時の事を誰かに聞きましたわ。而して私はどんなにお母様を立派な方だと思つて嬉しかつたか知れやしませんでした」

父も母も黙つた。而して滴りさうな愛情の露が眼の底に輝いた。

「それではお前は決心をして居るんだね」

何の事といふ當もなしに父が言つた。

「えい決心して居ますわ」と晶子は言つた。二人は互に言はざる問題を知つて居たのであつた。

併しねえ晶子、五郎も決心して居るとすれば何時まで待つても仕様がなせ」

死ぬまで待ちますわ」

「爾だらうね」

父と母は同時に溜息を吐いた。不思議な縫れ會に二人の子が生涯獨身で暮らさねばならぬ破目になつたかと思へば、運命の残酷さに胸を痛めずに居られない。

「それほどまでに決心したのなら、もう何も言のを止さうね」と隆二は松子を顧みた。

「言つて御しまひになる方が宜しうございませう」と松子は言つた。

「うむ」と首肯した隆二は「晶子、お前を嫁に欲しいと言つてる人があるのだ」

「誰方？」

「レ、レ、レからの宿題だが、例の奥田の倅だ」

人！」と晶子は肩を擡めて「いつまでそんな事を言ってるんでせう」
「處が其れは私に申込んだのでない。侯爵に直接談判をしたのだ」
「断つて下すつたでせうね」
「さあ何だか奥田が侯爵を丸め込んだらしいよ」

四

奥田が侯爵を丸め込んだにしろ、自分の厭な男の妻になるのは絶対に厭だ。
「併し御父さん。侯爵は私の身體を決める権利がありませんわ」
「でも生みの親だからな」
「それなら何故私を當家へよこしたんでせう。私は此處に居らつしやる御二人より他に親がありませんわ。私御父様や御母様が是非奥田へ嫁けと仰有るのなら私は死ぬ様に辛い思ひを懐へても参りますわ。ですけれども侯爵が何と仰有つても……」
晶子はほつと上氣した様に幾分か昂奮して言た。

「併し私が其れを拒絶すると誤解を受ける事になるからな」

「では私から御断りしますわ」

「私が入智慧をした様に奥田が思やせんか」

「何と思つても構ひませんわ」

父は黙つたが、霎時經て靜かに言つた。

「私も今保釋中だが、何時どんな事になるかも知れない身の上だ。お前だけの身の振方でも決まつてくれると私も安心して何處へでも行かれるのだが、出来る事なら奥田の方へ行たら仕慮だらう」

「御父様は私のためを思つてそんな事を仰有つて下さるんでせうけれども、私は五郎さんより外に良人が欲しくありませんわ。今の處では眞實心の底から愛して下さる親が欲しいんです。それを侯爵なんか……」

言ひかけて晶子はほろりと涙を零した。隆二も松子も共に涙を落して黙つた。頭の上の雑木の梢に小鳥が頻りに啼いて居る。夜は靜かであつた。

「お父様」と晶子は突然眼を父に向けた。「私に御暇を下さい」

「なに暇？」

「私、朝鮮へ参りますわ」

「どうして？」

「侯爵に會つて私からお断りして参りますわ。奥田にも會つて」

「それだけか」と隆二は念を押す様に言った。

「五郎さんの行方を探しますわ」

「五郎の行方はなかく解らん」

「でも一生懸命に探しましたら知れない事は無からうと思ひますわ」

「うむ、併し奥田が言ふまい」

「奥田さんが知つてるの？」と晶子は吃驚して言った。

「うむ、爾らしい。五郎は暴徒の群に入つて革命運動をやつてると侯爵に言つたらしいから」

「そんな事を奥田が……」

「あ、言ふのぢやなかつた私は悪かつた」と隆二は大變な過失を悔むもの、如く歎息した。

「それでも私、どうしても五郎さんを探し出しますわ」

「探してどうする？」

「五郎さんは朝鮮人の子だから私と結婚が出来ないと言ふんでせう。私は朝鮮人だつて日本人だつて同じだと思ひますわ。私それを言はうと思ひます」

「なぜあの時に言はなかつた？」

「その時には何を言つても聞きませんでしたもの。それに高井さんと結婚しろと仰有るけれども高井さんは兄さんと結婚なさいと言ふんですもの」

「お前は五郎を説き伏せる自信があるのか？」

「説き伏せなくても心に決めた人を探すのは私の道ではないでせうか？」

「では行くか」と隆二は元氣能く言った。

「やつて下すつて？」

「私は侯爵に義理を缺かうが、それはお前の關係した事ではない。お前はお前の正しいと思ふ」

處を行け」

五

谷中の深光寺の一室に机に凭れながら實は春も暮ゆく庭の躑躅を眺めて居つた。髪は悴びて顔は髭に汚れた上に此頃際立つて瘦せた鼻は鋭く尖がつて見えるので、恰がら病後の人の様である。

「雲を排して手づから妖雲を拂はんと欲す失脚墜ち來る江戸の城、井底の痴蛙……」
彼は靜かに吟じ初めた。低いけれども感傷的な曲折と詩語の氣分がしつとりと吟さむ自分の魂に減入り込みさう。

「身は鼎鏝に臨み家に信なく、夢に鯨鯢を斬て劍に聲あり……」

「いやだわ兄さん。折角の氣分を攪亂されてしまつたわ」

障子の蔭に白い脚が二本見えたかと思ふと菊子は起上つて顔を出した。

「兄さん古いわ」

「どうして」

「今ま時そんな變な詩を吟ずる人は無くつてよ」

「併しそれは頼三樹が滿腔の不平を訴へた詩だ。尊王攘夷に一身を捧げた人達の詩は文字を玩弄する詩人の詩より遙かに尊いね。當時の志士の心根を察すると實に涙が零れるよ」

「さあ〜急いで参りませう。馬の背中に鞭が鳴る」と菊子は兄の話聞きもせずには嘖ひ出した。

「おい此處はお寺だからね。そういふ唄やヴァイオリンはよせよ」と實は眞面目に言ふ。

「可いちやないの？お寺だつて木魚や鉦なんか叩くんだから」

「お前はのんきだなあ」と實は苦笑した。

「兄さんは何だつて其那にじめじめ入梅時の様な顔をなすつてるの？私陰氣で仕様がないわ」

「併し僕はこれで可いんだよ」

「お茶を頂戴兄さん」

「此處へ来てお飲みよ」

「此處の方が可いのよ。日向ぼっこをして居ると快い氣持よ。出て被來やいよ」
「うむ」

實は澁々ながら茶盆と急須を持って縁側に出た。

「お前は全く日向の人間だね。陽氣で騒々しくて、僕は日蔭の人間だ」

「だつて兄さん仕様がないちやないの」

「性格が異うんだね」と實は又もや庭を見やつた。躑躅の紅がぱつと燃えて緑の下草に照り返すと白い蝶々が何處からとなく一つ見え二つ見えつして静かな芝の上を飛び廻る。

「段々夏になるんだわね」と菊子は両手を自分の内懐に入れたまゝ、肩をだらりとして辛氣くささうに言つた。

「うむ、もう五月だからな」

「早いもんだわね」

「うむ、つい此間正月だつたがね」

「爾よ、あれはお正月の終りだつたのよ」

實は答へなかつた。我が運命の決まつたのは而して妹の運命の決まつたのも此の正月の霜寒き夜であつたのだ。

「何處に被居やるんでせうね」

「さあ」

二人は又た黙つた。日光はぢり〜と暖かに二人の顔を照りつけた。

「あ、私結婚しやうかしら」と菊子は突然言つた。

「何を言ふんだ」

「私、結婚したくなつたわ。心淋しくて堪らない」

「妙な事を言ふなお前は」と實は稍々呆れて、

「謹まなくちや不可いよ」

「あ、私戀をしたい」

「馬鹿だね」と實は逃げる様に室に入つた。

「だつて兄さん貴方は什麼思つて？」と菊子は障子越に逃げ込む兄を見やりながら言つた。
 「何を？」

「貴方だつて失戀の人でせう。淋しくない事？」
 「僕は淋しくないが悲しい」と實は机に頬杖を突いて茫然と答へた。

「どうして淋しくないの？」

「晶さんが後日幸福になるだらうと思へば淋しい事はないさ」

「貴方は他人の財を數へて自分で金持になつたと思つてる人だわね。鰻屋の前を通ると御飯を食べてしまつた氣になるでせう？」

「そうかも知れないよ」と實は煩ささうに答る。

「どうして悲しいの？」

「五郎君の行方が知れない間は晶さんが什麼に悲しいだらうと思ふと僕も悲しくなる」

「それなの？淋しくないが悲しいと言ふのは」

「爾だ」

「貴方は何處までも犠牲的で他愛的で献身的だわね」

「お前は什麼だ」

「私は人の事なんか構やしないわ。私は他人と何の關係があるでせう。私は個人主義よ」

「ではお前は人を愛する資格が無いね」

「そうかも知れないわ」

「ぢや五郎君の事は？」

「私が愛してるのよ。少しも變りはないわ」

「今でも？」

「えい」

「晶さんと結婚しなければならぬ人であつても？」

「私が好きで愛してるのに晶さんと結婚しやうが什麼しやうが構はないぢやないの」

「併し五郎君が……」

「五郎さんが私を愛してくれなくなつて可いわ。私が五郎さんを愛してるんですから」

「呆れた。實にお前は新し過ぎる」と實は言つた。

「あゝ、詰らない」と菊子は居すまいを直して「私死ぬ様な辛い思ひをして見たいわ」

「辛いと思はんのかね」
「まだくもつと呼吸も吐けない様な苦みの渦巻に巻かれたい。そうしないと生きてる様な気がしない」

此時寺の婆さんが郵便を持って来た。

「郵便ですよ御嬢さん」

「あら嬉しい」と菊子は立て郵便を受取り「あら晶子さんからだわ」

「晶子さんから？」

「封を切ても可くつて？」

「いや、僕が見てからにしてくれ」

實は封を切て読み下した。其れには両親の許諾を得て今度朝鮮に行く、當分御前に掛れぬかも知れないが五郎の居所に就て多少の手掛があつたら至急知らして貰ひたい。女で一人旅は不安心だといふので六藏さんが一緒に行つてくれる事になつたから安心して下さい、どんな事でも一應は貴方方御二人に相談しろと兄さんが毎も言つて居ましたから此の事を御知らせします。其他細々と認めてあつた文言を實は繰返し、読んで菊子に渡した。菊子は一通り読み終つて巻返しながら兄の顔を凝と睥めた。それには兄に對して如何にも同情の色が溢れて居た。「僕も行かう」と實は突然言つた。

「どうして？」

「晶さんの身體は僕が一切五郎君に委託されてあるんだ。晶さんばかりを行るわけには行かん」

七

五郎の行方を探しに行く晶子に従て共に行かうといふ實の言葉に菊子は霎時考へ込んだ。五郎さんの行方の知れる時は兄さんが確實に晶さんを五郎さんに渡さねばならぬ時で、即ち兄さ

んが永久品さんを失ふ時なのだ。目的を果たす時が自ら滅ぶる時だとすれば、わざわざ、自滅に向つて進む兄さんの行爲は愚かな話だ。

「行つても詰まらないぢやないの？ 失望が来るわ」と菊子は言つた。

「失望ではないよ、満足だよ」と實は急に元氣づいて五郎君は不逞鮮人の様に誤解されて居るらしい。僕は友人として一日も早く五郎君を探し出さねばならなかつたのだ。

「どうしても行くの？」

「うむ」

「私も行きますわ」と菊子は笑ひながら言つた。

「お前が？」

「あら私も行く」と品さんが氣を悪くすると思つて？ そんな古い品子さんぢやないわ。私手紙を書きから見れば被りやい」

實は旅行と決心していろく、旅支度の心算を胸に描いてる中に菊子はペンをさらりと洋野紙に走らした。

「品子さん、御手紙拜見しましたわ。貴方が朝鮮に被行やるんですわね。其れは御尤も事だと思ひますわ。ですが、貴方を五郎さんから委託されたのであるし且つ親友の行方を探すのは義務だといふ理由の下に兄がお供をしたいと言つて居ます。同時に私も御一緒したいのです。露骨に言ふと私は五郎さんを愛して居ます——貴方が御承知の如く——そこで貴方と私とは戀の競争者の様なものです。其れを兄が心配してお前は行くと言ひます。併し一緒に行ても行かんでも、心に競争してるのなら同じ事ですわね。のみならず私は決して競争をしませんもの。貴方は五郎さんと結婚なさらうとなさるまいと、私は何でもありません。私は只だ五郎さんに戀をして居るのです。戀をして居る間は私の生命です。私は五郎さんと結婚しやうとは望みません。實際結婚なんて世間の問題以上の處に私の靈がふわりふわりと遊んで美しい五色の光に輝いて居るのです。夫だけで可いのよ。だから私に思はして置いて下さい。五郎さんに戀をさせて置いて下さい。此の戀が冷めたら私は他に又戀を探しますわ。戀だけで可いのよ。私は自分の夢に生きてるのよ。そして戀する男を朝鮮くんだりまで探しに出掛けていろく、な苦勞をするなんて、恰で探偵小説見たいな事は今の淋しい私にどんなに活氣を與へる事です。私の

兄は五郎さんを探して貴方に手渡しする事を唯一の目的として居ますが、私はそんな舊道徳家の様な考へは一つもありません。私は東京から朝鮮へ行くまで汽車の中や船の中で五郎さんの事ばかりを思ひ詰めるでせう。朝鮮へ行つてから諸所方々と五郎さんを探し廻るでせう。その間の氣持は緊張まつて興奮して何も彼も五郎さんの事で充たされて居ます。それが私に嬉しいのよ。そういふ氣持がね、丁度子供の時に明日は運動會だといふ晩に御辨當や果物の事を考へながら床に就く様な氣持がね。……そして散々苦勞をして五郎さんを探し當るでせう。それは夢から現實に還る時なのよ。その時は悲しいか嬉しいか解らないけれどもそんな事は考へたくありませんわ。此の心持は多分貴方にも御解りでせう？積木をしてる中が樂みなのよ。出来てしまへば掻き廻して壊したくなる、私は其れよ。あとで積み直すのは貴方の義務よ……おわかりになつて？では私も御供さして戴きませう」

八

朝日は輝いて居る。蠟燭の様に突立た裸な島の影が晴れやかな港口に深い影を洒して今ま入

つて来る高麗丸に目禮して居る。高麗丸は汽笛を鳴らして靜かに棧橋目蒐けて徐行する。甲板の上には早や上陸が待遠しさに袴や毛布などを膝の下に置いて首を伸ばして居る乗客共が、未だ眠り足らぬ顔を一樣に朝日に照らされながら出迎人を群集の中から見出さうとして居る。何れの港を問はず朝の着船の時ほど爽かに賑やかなものはない。

「あらもう朝鮮なの？」

甲板の欄干から港を見やつて菊子は大きな聲で言た。

「爾だ。あの島は絶影島だつたのだね」と實は學帽の廂を摘んで「あ、實に美しい」と日に光る山々の方へ向き直つた。山は翠微の色深く處ろくゝに禿け山が見ゆる。其の麓に連なる釜山の市街は今ま明け放れた朝の靄から次第々々に浮き出して來た。

「あ、釜山ですね」

晶子は少し寒いので裕の上に紫紺飛び模様の書生羽織を引掛けて居た。彼女は昨夜も殆んど眠らなかつた。これから先が什麼なる事か、若し五郎に逢ふ事が出来なければ生涯日本へは歸るまい。恚ういふ決心は彼女の胸を波立たせた。汽船に乗つたのは生れて初めてである。

「兎も角も京城へ着いて侯爵に會つて奥田の事を御断りしなければならぬ」
 差向きの用事は其れであつた。船が棧橋に着くと汽車に乗るまでには一時間の餘裕があつた。
 晶子、菊子、實と六藏の四人は群がる荷揚人足や案内者や客引などの間を摺り抜けて街の方へ歩き出した。海岸は埋立の工事で朝鮮の人夫が幾千人となく動いて居た。只だ見た許りでは如何にも立派な顔をして長い髻を蓄へて居る軀幹偉大な人間が背中に重い荷を負うてぞろぞろと歩き行く。其は頗る暢氣なもので一歩々々に自分の足元を覗いてるかの如く思はれる。是等の雑沓した路傍に一人の日本人が立つて居る。其は人足共の頭らしい、彼は極めて長々と繩に繋いだ二文錢を膝に抱いて居る。そして其の一文づゝを人足共に拂ふのである。稀に番號が違つて居ると拳骨がびしやりと横面に飛ぶ。

「哀號！」と悲しさに叫んで人足が御辭儀する。そこで二文錢を貰つて群の後を追うてゆく。此の光景を見た晶子は涙が眼に一ぱい湛まつた。

「可愛さうだわねえ」

「あれでも人間なんです」と菊子も感慨に打たれて言つた。

「僕等は日本に生れた事を實に感謝しなければならぬ」と實も言つた。

「何處へ行つても朝鮮人が此那に苛められてるの？」と晶子は眉を擡めて「もう市街を見るのは止ませうよ」

四人は足を返して停車場に入つた。一同の眼には見るものが不思議でならなかつた。同じ人間に生れながら什麼して恚う待遇の差別があるのだらうか。日本人は何故に斯く朝鮮人を侮辱するのだらうか。

端なく實と菊子の議論が始まつた。

「日本は優勝國であるから朝鮮を導いてやるのだ。朝鮮人は未開だ、無智だ。鞭撻したり辱かじめたりするのは當然だ」

「恚ういふ實の議論に對して菊子はどうしても服する事は出来なかつた。

「導いてくれと願ひもせぬのに日本が勝手に導いてやらうなんて餘計な御世話に飛込んで来て土地を取つたり人足に使つたり動物の様に虐待するのだとすると其れは實に不法ですわ」
 菊子は何處までも争つた。

ほんの一時間に足らぬ觀察で實と菊子の考へが全然西と東と隔たつたものになつた。實は凡ての風物が日本化し、日本の武威と文化が朝鮮に及び、國土が擴張されて東西の大陸續きに根據を占むる様になつたと思ふと愛國の情火と國力の矜持に若い血が躍り出して日本帝國萬歳を心に叫ぶのであつた。然るに菊子は其れと反對に滅茶々に日本が憎らしくなつた。弱い者を苛める日本は人類の敵だと言ひたい様な氣がする。狡猾さうな利巧さうな眼をしてる小さな日本人が、大きな牛の様な朝鮮人を侮辱してのを見ると堪らなく腹が立つ。

「文明は人類の幸福だと誰が言つたんでせう。文明といふ者は人類を攪亂するものぢやないでせうか。食うて生きてれば幸福だと思つてる者に餘計な世話をやく必要がない。日本に虐待されるよりか未開人と言はれても暢氣に暮して居る方が朝鮮人の幸福なのだ」

菊子は慙う確乎と考へを決めた。何とはなしに大きな問題が自分の頭に充たされた様な氣がする。そして其れは自分の美しい血を益々美しく飾にかける様な氣がするのであつた。

晶子は二人の議論を聞いて居ても左まで興味を感じなかつた。彼女は只だ五郎の事ばかりを思ひ詰めて居た。京城へ行たら手掛を得るだらう。實際彼女は朝鮮は此那に廣いとは思ひ設けぬ事であつた。併し父の侯爵に願つたら屹度五郎の行方が知れるといふ確信は彼女に光を與へた。彼女は只だ微笑した。和かな春の様なものがふうわりと羽根の様な胸を開いて自分を待てると思つた。

四人は京城に着いた。直ぐ總督官舎へ行くと副官が出て来て四人を二階の室へ案内した。像て準備してあつたと見えて晶子と菊子は隣り合つた室を一つづ、與へられた。室は何れも氣持が好かつた。

「離れくでは淋しいから皆な私の室へ御一緒になつたら什麼？」と晶子は言つた。

「いゝえ、同じ室に居るとお互に煩さいと思ふ事があるから別々の方が可いわ」と菊子が言つた。

晶子は父が自分の室に来るだらうか。但しは自分が父の室に召ばれるだらうかと待つて居た。併し其の日は父から何の沙汰もなかつた。夕方になると四人は最早や意屈し出した。そして實

と菊子が又もや議論をし出した。そこへ重い靴の音がして父の姿が現はれた。

「おう皆な来たか、電報があつたので室を掃除さして置いたがお同伴があつたので結構だつたな」

侯爵は軍服の儘で入口に立ちながら憊う言つた。

「疲れたらう。休め」

それきりで去つてしまつた。翌日は四人で京城の町を見廻つた。其の夕方又た父の姿が見えた。

「朝鮮は見る處がないぢや、疲れたらうから休め」

それきりで又もや去つた。例の奥田の話もなければ五郎の話もない。晶子としても自分から父に言ひたい事は山々ある。併し父は殆んど三分間と對話する事が出来なかつた。

「疲れたらうから休め」

三日も四日も同じ事を言ふのみであつた。

同じ事を繰返して一週間は過ぎた。或日楠侯爵は晶子を室に召んだ。

「お前は何か、縁談の事が承知で来たのか」と侯爵は言つた。

「どんな事なんですか」と晶子は胸を静めて問ひ返した。

「奥田からお前を所望しとるのぢや」

「其れは厭でございます」と晶子は決然と言つた。

「どうしても厭か」

「はい」

「私が命じたら？」

「私が貴方に命令されべき理由がありませんもの」

「なぜだ」

「貴方が私に命令なさる事が出来ると思召して被居いますか」

晶子は冷やかに父の顔を見上げて言った。

「理窟を言ふのか」と侯爵は怫然として、「若し私がお前の親だとすれば」

「父は二人あるべき筈がありません」

「何を？」と侯爵は凝と晶子を見詰めた。

晶子は怯びれもせず父の眼を見上げた。父は霎時呼吸を窘まして肩を揺つて居たが臆て急に言葉を和けた。

「私はお前の將來の幸福を思ふのぢや」

「いやな良人を持つ事は將來の幸福ぢやありませんわ」

侯爵は何も言はなかつた。彼は不安さうに室内をぐるぐる歩いた。而して扉に手を掛けて、

「彼方へ行つてもよろしい」

晶子は自分の室に歸つて物と息を吐いた。ものゝ三分も経たぬ中に又もや侯爵に召ばれた。

侯爵は佩剣のない軍服姿で、卓子に凭れて頬杖を突いて居たが晶子を見て直に慙う言つた。

「お前は五郎を思つてるんぢやね」

「はい」

「五郎の居所を知つて居るか」

「存じません」

「行方の知れないものを什麼するか」

「死ぬまで探します」

「探して？」

「五郎さんの心持を確かめて見ます」

併し五郎が若しお前と結婚する氣が無かつたら」

「いゝえ五郎さんは私を思つて下さいます」

「若し五郎が法律上の罪人だつたら」

「そんな事はありません」

「いや、若しもぢや」

「それでも私」

「國法を犯す大罪人だつたら什麼するか」

「國法？」

「五郎は陰謀鮮人の群に入つて日本政府に反抗しとるぢや」

「そんな事はありませんわ」と晶子は立ち答へた。

「無いといふか」

「はい」

「いや五郎は逮捕された。平壤の裁判所へ護送された。晶さん他の事とは異ふ。日本に反抗して總督の私を暗殺しやうといふ陰謀者をお前は良人とする事が出来るか」

「確かに五郎さんでございませうか」

「秋山武男と偽名しとる」

「私は信じません」と晶子は蒼白になつて唇を顫はした。

「証拠が充分だ」

「私は信じません」と晶子は再び言つた。

「日本に生れたが矢張り血統は争はれんものぢや、朝鮮人の子は朝鮮人だ。匪賊は釋す事が出

來ん。無論お前と結婚させる事は出來ん」

侯爵は慙う申渡す様に言つた。

「でも侯爵」と晶子は暫く胸に手を當て、言つた。「其れは兄さんに御會ひになつたらお解りになりますわ」

「可しッ今に當地へ護送させるから」

侯爵は腹立たしげに言つたが直に晶子に向つて「お前もよく考へて見てくれ」と優しく言つた。晶子は溢れんとする涙を漸と掠へて居た。

一一

晴天の霹靂とは此の事である。今まで奥田が五郎の悪口を言ひ廻り不逞鮮人の群に入つて居るなど、言つてる事を耳にせぬではなかつたが、事は餘りに重大である。陰謀者として既に逮捕されたとは何たる事であらう。

晶子は直に實兄妹に謀つた。

「決して／＼そんな事はない」と實は非常に昂奮して言つた。

「あるかも知れないわ」と菊子が言つた。「日本人があんなに朝鮮人を虐待するのを見ると刃だつて反抗したくなりますもの」

「國法を犯すなんてそんな事は」と實は敦圀く。

「貴方は日本人だから其那事を言ふけれども五郎さんは朝鮮人でせう」と菊子は冷やかに言つた。

「お前は何だ」

「私は何處の人でもないわ。人類の一人よ」

「お前は實に非國民だ」と實は満面に朱を注いだ。

「喧嘩しても仕様がな。僕は行つて来る」と六藏は立上つた。

「何處へ」

「平壤へ」

「平壤へ行つてどうするんだ君」

「五郎さんに會つて見る」

「重罪犯人だから逆も會へないよ」

「會はせなければ暴れ込んで會ふまでだ」と六藏は昂然として言つた。

「一體會つて什麼するんだ」

「其れは未だ考へて居ない」と六藏は頭を搔いた。

「兎も角も、果して五郎君が陰謀者として逮捕されたもので、而も當地へ護送されると決まつてゐるなら其れまで待つのが一番可からう猥りに騒ぎ立てると却つて悪い」と實は一同を宥めた。

「併し裁判官なんてものは無茶な事をする場合がある。いつかの新聞に死刑に處せられてから二十年後に其人が冤罪だと知れたといふ事が載て居たが、五郎さんの冤罪もそんな風になると取返しが付かないから、兎も角も護送の途中で五郎さんを奪ひ出す方が可いと思ふ」と六藏は言つた。

「それこそ國法を犯すものだよ。兎も角吾々は五郎君の冤罪を信する以上は公平なる裁判に任するが可い」と實は飽までも六藏を戒めた。

其の夜は晩くまで四人が語り合つた。菊子も例の虚無主義は言はなかつた。六藏も昂奮から冷めた實は絶えず首低れて思案に耽るもの、如く而して幾度も口の中で「決してくそんな事は」と繰返した。晶子は三人の友が凡てを忘れて五郎の身の上を氣遣つてくれるのが嬉しかつた。窓の硝子に月が射した。下街の灯影が段々に滅つた。

「今頃は什麼なすつてるでせうね」と晶子は言つた。

「牢の中で眠つてるかしらん。但しは何か考へに沈んで」と實が言つた。

「せめて私達が此處まで來てる事だけでも知らしてやりたいわ」と菊子は言つた。「それがどんなに慰安になるか知れないわ」

一同は之に賛した。護送されて來る日に一同が監獄の前に立つて居たら五郎さんの眼に留まるかも知れない。此の提議が直に決まつた。

「護送の日取を候爵に訊ねて見ませう」

晶子は恚う言つた。

思ひくの室に入つたが其の夜は眠られなかつた。晶子は窓から顔を出していつまでも月を

眺めて居た。

「五郎さんは今頃あの月を見て被居る。そして私の事を思つて被居る」
恚う思つて不圖隣の窓を見やると其處に白い顔が見えた。

「菊子さんなの？」

「えい」

「まだお寢みにならなくつて？」

「眠られない」と菊子は言つた。

「私もよ」と晶子も言つた。

一一一

二人の女が月を眺めて居た時、五郎も矢張り平壤の獄舎で同じ月を眺めて居た。今日か明日かと思つて居たのが此に十日を過ぎた。今は例の永梅吉も居ない。此儘に何時まで拘留して置く積だらうと思ふと腹立たしさに氣が狂ひさう。けれども彼は此に容易ならざる不穩の空氣が

「潜んで居るのを見た時に彼は寧ろ自ら自分の運命を嘲りたくなつた。

「日本のために骨身を惜まず働いてるものが政治破壊者として此の憂目に逢ふとは不思議な話だ」

「怨う思ふと彼は政治機關の信すべからざる事や、警察や法律が案外に過誤の多い事に驚かざるを得なかつた。

「一體國家とは何だらう」

彼は怨う考へ出した。多數が集まつて國家を組織する。其れは互ひに生きて行きたいためである。然るに政治機關が人間の生きて行く事を阻害する事がありとすれば寧ろ國家が無い方が可いのだ。然らば自分は國家を不必要と認むるか。

此の點に至つて五郎は又もや疑惑に陥つた。國家が必要の様でもあり又不必要の様でもある。結局永梅吉の様に放浪して歩くのが人間の最上の自由で最上の幸福かも知れない。

「俺は日本人でもない。韓人でもない。畢竟一個の蟲に過ぎない」
結論は怨うであつた。隣室から扉が聞ゆる。當番の巡查の靴音が夜深の底に聞ゆる。

「蟲だ、俺は誤つて地上に生れた人間の形をした蟲だ。凡ての人間も蟲だ」

彼は枕を更へて眠らうとした。眠られぬ。拘留所の板の隙から月の光が漏れて来る。初夏の夜は静かで甘くて軽やかな風が吹いて居る。彼はほんの針の尖ほどの月光を凝と見詰めた。月光は段々に擴がつて板に暈の様な白いものが處ろくに見えた。暈が擴がり出すと其れが黄色と青との輪廓を幾つも描いてぐるぐる廻り初めた。果てしもなく旋轉する。刻一刻に光が加はる。と其の渦卷の中から突然として晶子の顔が現はれた。あつといふ間もなく其れが搔消す様に消へて燼ぼつた電燈が天井に鈍い色を抹して居る。

「晶さんは什麼して居たらう。高井は：御父さんは：母は：而して菊子さんは：」
考へ來ると殆んど夢の様、何のために故國を去つて此の災厄に飛込んだのか。懐かしき人々は凡て日本人である。だが恨めしきは日本の警察である。

「詰らない」

彼は怨う言て又た眼を閉ぢた。うとくとなつたかと思ふと巡查に起された。
「おい起きろ」

「何だ」と五郎は言った。

「何だとは何だ」と巡査が言った。

「お前が僕に向つて起きろといふ失敬な言葉を發したぢやないか」

「貴様は罪人だ」

「罪人ぢやない。裁判所で判決がない中は罪人ぢやないぞ」

巡査は黙つた。而して「一體なら恕さん處だが、お前は特別の保護を加へなければならん人

間だから今だけは恕して置くぞ」

「特別の保護とは何だ」

「これから京城へ護送するんだ」

「京城へ？」

「うむ、さあ起て」

「なぜ京城へ行くんだ」

「總督府からの命令だ」

「なぜそんな命令をするんだ」

「本官には解らん。さあ起て」

「今ま何時だ」

「一時頃だ」

「眠いから明日にしろ」

「其れは不可」

「ぢや行かう。さあ繩を掛けろ」

「それには及ばんよ」

一三

繩を掛けもせず京城まで十時間の汽車で護送するとは不思議な事だと五郎は思つた。

「どうせ懲うなれば國事犯として京城の裁判所へ廻されるのだらう。公判の時に萬丈の氣焔を吐いてやるまでの事だ」

彼は恚う覺悟を決めた。

「さあ早く出ろ」と巡查が言ふ。

「僕の鞆を出せ」

「貴様の鞆なんか本官は知らん」

「それぢや出て行かんぞ」

「待て〜」と巡查は鞆を探し出した。

「帽子は？」

「此にあるよ」

「うむ感心な奴だ」

「生意氣な事を言ふな」

二人は悪口を言ひ合ひながら外へ出た。そこに自動車が待つて居た。

手廻しが可いね。辨當の用意は可いか」

巡查は苦々しさうに横を向いた。汽車に乗ると乗客の大部分は眠つて居た。

「此處で繩を打つかね」と五郎は言た。

「いゝや」と巡查は答へた。「只だ護送すれば可いのだ」

「それが特別たる處かね」

「どうも不思議だよ」

「では僕は無罪なんだね」

「さうかも知れんよ」

「では僕は此處から歸つても可いだらう」

「其れは不可、本官の責任に關する」

「君の責任に關しても僕の知つた事でない」

「では本官はお前を捕縛する」

「僕は無罪ぢやないか」

「無罪とは誰も言はんよ」

「誰も言はんでも僕が言ふ」

「黙つてくれ、人が此方を見るから」

「それは僕から言ふ言葉だ。巡查附の旅行なんて餘り見つとも可いものぢやないから」

「何でも言ふが可い。そら汽車が動き出した」

「汽車は平壤を出た。巡查は辨當二本を買つて一本を五郎に與へた。」

「おい禮を言はんか」

「官費だらう」

「巡查は苦笑した。而して自分の辨當を睨めては淋しさうに舌打した。」

「一合飲みたい處だね」と五郎が言つた。

「侮辱するな」と巡查は眞面目になつて又辨當を睨めて溜息を吐いた。

「おい握手をしやう」と五郎は手を差出して、

「君は實に好人物だ」

「恚う言つた時汽車はひたと停まつた。」

「おや什麼したんだらう」

「巡查が窓から顔を出すや否や轟然たる響が耳元に轟くと共に汽車が横倒しに倒れた。電燈が

ふつと消えて暗の中に起る悲鳴の聲、喊叫の聲、物といふ物の破壊の音。

「おい巡查」と五郎は腹這ひになつて呼んだ。答がない。

「大丈夫か、巡查」

「呻き苦む人々を掻分けて巡查の方へ寄らうとした時、懐中電燈がぱつと眼先に閃いた。」

「早く、秋山君」

「五郎はふいと顔を上げた。電燈の光に確かに認めしたのは永梅吉であつた。」

「おう、君」

「電燈が消えた。永梅吉の手が五郎の肩に掛つた。そして遮二無二押し出した。」

「早く、早く」と彼は五郎の耳に囁いた。

「何處へ行くんだ」

「黙つてろ、行けば解る」

「轟然たる音が再び聞えた。五郎は永梅吉に押されて外へ出た。眞黒な雲が月を呑み盡くして

天に星が疎らであつた。雨がばら／＼降り出した。

一四

其れは殆んど咄嗟の場合である。五郎は前後を顧みるの暇がなかつた。彼は永梅吉の走るが儘に走つた。茫々たる高梁の平野で雨後の月が物凄くほど淋しく二人を照した。

「大丈夫だ。少し休まう」と二里ばかり走り續けた處で永梅吉が言つた。遙かの線路に沿うて電燈の光がちら／＼と見えた。雲に其の光に映つて抹した様に明るい。今まで聞えて居た人々の叫び聲や汽笛や馬蹄の響なども聞えずなつた。

「失敗した」と永梅吉は呟く様に言つた。

「一體これは什麼したんだ」と五郎は訊ねた。

「何ね、ちよいと嚇かしたんだが、實は軍用金の取立といふわけさ」と永梅吉は舌打して、

「あの汽車には確かに金貨を五六百萬圓は積んでる積だ」と永梅吉は舌打して、

「爆烈弾か」

「なにね、汽車を毀す目的ぢやない。汽罐車を止めて金だけ取るつもりだつたのが、少し早まつたから失敗したんだ。勿論あの汽車に君も乗てる事だけは僕が平壤を出る時に突き留めて置いたのだ」

「一體君は何だ」と五郎は答める様に言つた。

「そんな事は聞かんでも可いよ。今に解るよ」

「併し僕は君等の仲間となつて不逞鮮人となる事は出来んよ」

「解つてるよ。悪い様にはしないよ。兎も角も僕の大將に會つて見給へ」

「大將とは誰だ」

「李成民だ」

「李成民？あれは不逞の巨魁ぢやないか」

「何でも可いよ。會へば解るからね。君は今此處から平壤へ歸つた處で嫌疑を受ける許りだよ。汽車を顛覆した一味徒黨だと思はれてるからね」

五郎は吃驚して溜息を吐た。

「伏せく」と永梅吉は慌て、言つた。そしてひたりと高梁の中に腹這ふた。五郎も其の通りにした。その一瞬間に彼は馬蹄の響を聞いた。響は段々近づいて来た。一騎、二騎、三騎……一群の騎馬の人が驀然に駆けて来た。そして二人からほんの二三間の向ふを走り抜けた。「憲兵だ」と永梅吉は言つた。そしてむくくと起上つて馬蹄の音を聞澄まし「占めた見當違ひをしてやがる」と獨り笑つた。

「何處へ行くのか」と五郎も起上つた。

「此の眞直で可いのだ」

二人は歩き續けた。何處を見ても高梁ばかりである。とびとびに人家があつた。併し永は休まうともしなかつた。幾里の路を歩いたか知れない。

「夜が明けた」と五郎は遙かに白み渡る天を眺めて言つた。

「海の明りだ」と永は笑つた。いかにも其處は海岸であつた。海岸には幾つもの船が停泊して居た。短船もあり團平船もありチャンクもあり、小蒸汽船もある。灯影がちらちらと動いて其處に人の往來う影も見える。

「誰か」と岸に立つて居る男が日本語で叫んだ

「西から三番五番七番の船と」永は答へた。

「早く行け」と男は韓語で言つた。堤傳ひに小さな家が五六軒並んで居る。家はどれもく火を焚いて其の周圍に無數の顔が見える。赤兒を抱ふ女も居る。風呂敷を被つた婆さんも居る。荒くれの男共は飯櫃から飯を出して頻りに食つて居る。

「まるで夢の様だ」と五郎は思つた。と此の時がやくと五六人の男が船を出て来た。

「總督が御出だ」と聲々が言つた。飯を頬張つた男共は慌て、飯櫃を形付けて其處らに敷物を敷いたり木製の椅子などを据ゑたりした。

「李成民が来るのだ」と永は五郎に囁いた。

一五

薪が更に燵べられた。火は天井を焦す様に燃え上つた。聽て立派な紳士らしい洋服の人々が一人の老人を圍みながら靜かに入つて来た。

「可しく皆な食事を濟ませるが可い。用のないものは船へ行け。そして當番のものと代るが可い」

老人は恚う言つて帽子を取つた。銀の様な白髪が後ろまで撫で上げられてあるのが見えた。長い眼の底には何とも言へぬ優しい光があつて、少し狭まつた眉の間には其の才智と果斷とを思はせた。身の丈は人々よりも一二寸高い。瘦せて鶴の如しとや言はん。寄る年波と身に餘る國事の苦勞とで深い皺が彫まれて居る。彼は敏くも五郎を見出した。

「誰か」と直ぐ詰責する様に言つた。

「日本人で、秋山武男といふ者です」と永は答へた。

「うむ、平壤だね。牛の事で百姓を助けた人か」

「爾です」

「難有う」と老人は再び帽子を脱いで挨拶した。「私は李成民と言ふ者です」

「僕は秋山です」と五郎は言つた。

「貴方の事は永梅吉から聞きました。私は韓民に代つて御禮を申します。併し貴方は今夜の汽

車の事を御存じでせう。私達は好んで此那事をする積ではありません。國を奪られ家を奪はれて住むに處が無くなれば勢ひ此に至らざるを得ないのです。勿論善い事ではないが、日本人は其れよりも悪い事をして居ます。東洋人は互に親和して歐米と競争しなければならぬのに、日本人はなぜ韓人を恚那に虐待するのでせう。私達は日本よりも米國の更に恐るべきを知つて居ります。だから私達は日本に親みたいのです。だが日本は私達を容れてくれません。私達は船に乗つて南へ北へ逃げ廻ります。食糧を求めます。金品を求めます。百計盡きれば非常手段に出でます。生きて行くには止むを得ないのです。貴方は私達の行爲が悪い事だと思ひますか。流暢な日本語で李成民は諄々と訴ふるが如く言つた。五郎は其の感歎な態度や斷乎とした威嚴ある言葉や、而も溢る、如き愛國の至情に一方ならず感激した。

「どうです。貴方の御考へは」と老人は再び言つた。

「僕には解りません」と五郎は明瞭と答へた。

「善か悪か、道德的の解釋は他人に譲りませう。只だ僕は日本人です。日本に反抗なざる御計畫には賛同する事が出来ないのです」

「御道理々々」と老人は言つた。而して永を顧みて「此の方は正しい方だ。船の方に御案内するが可い」

「怒う言つて再び五郎に向ひ、

「私には秘密がありません。私達は今重大な相談をするのですが、貴方が聞きたければ此の席に居るが可い。必要がなければ船へ行つて御寝みなさい。若し此處を去りたければ船もある馬もある。どちらに乗つてお出になつても宜しい」

「疲れましたから寝まして貰ひます」と五郎は言つた。そして一同に一禮して家を出た。海の彼方は僅かに夜明の光を漂はして居た。

永梅吉の案内で一艘の荷船に入つた。そこには罐詰入の箱が充滿に詰まつて居たので彼は箱と箱との間に辛うじて身を横たへねばならなかつた。

「熟睡したまへよ、此處は大丈夫だから」と永梅吉は言つた。そして直ぐに去つた。五郎は黙つて耳を敏てた。波の音が遠くから近くから疊みかけて来る。其の度毎に船がきしめく、船底は漆の様に暗い、その暗い中に李成民の銀髪がはつきりと浮いて来る。

風が吹く度に船底がぎい〜と鳴つた。一しきり萬籟が静まつて夜と朝との境目の閑寂がしみじみと迫つた。

「あの老人が」と五郎はまぢまぢとして獨りで言つた。「あの老人は實に豪い」

豪いといふよりも寧ろ何とも知れぬ威嚴と懐かしさに満たされてる一種の神體の様に思はれた。毫しも氣取た處がなく誇張的な處がなく、ほんの眞直な心を其儘に人に提供すると言つた風。あの老人には秘密がない。策略がない。只だ國を愛し同胞を愛ふる至誠の結晶である。西に東に逃げ廻つて國事に盡して居る。其れは丁度日本の維新當時の志士に似て居る。而も粗放な磊落な漫りに感情的な日本流の豪傑でなく人と人との間に本當の骨肉の様な親しみを有つて居るかの様である。

「多くの人民のために苦勞をして居る有難い人だ」

五郎は恚う想つた。而して敬虔の氣が胸に溢れて涙が止め度なく落ちた。彼の涙には日韓の

差別はなかつた。其れは人類共通の美しき犠牲に對する感謝であつた。
 「あの老人は朝鮮人の父であり神であるのだ」
 彼は恚う言つて額に手を當てた。

「だがあの老人は日本のためには敵だ。人間として尊敬すべき偉人でも、國家の立場からして敵としなければならぬとは何といふ悲しむべき事だらう。吾人人類は國籍を擯廢し、人種の區別を去り、世界人類のために幸福を増進する様に努むるのが本當であるまいか」
 五郎は突然極めて重大な問題に觸れた。

「若しもあの老人が僕の父であつたら什麼だらう」
 此の突飛な想像が彼の頭に夕立の雲の如く非常な疾さを以て擴がり出した。

「若しも父であつたら」と彼は繰返した。

「僕は日本を愛する。父は日本に反抗する。僕の血と肉は朝鮮人で、靈魂は日本人である。僕は父に従ふべきか但しは日本に屬すべきか。あの老人が父であるとすれば……」
 霎時考へて彼は恚う言つた。

「そんな事はない。あの老人が僕の父だなんて其れは餘りに小説めいて居る」
 彼はもう恚ういふ想像を止めやうと努めた。而して外の方に耳を敬てた。會議が果てたと見えて、こそく船に歸る人の足音が聞えた。

「おい眠つたか」と船底を覗いて永梅吉は上から聲を掛けた。五郎は急に跳起きた。
 「僕は歸る」

「何處へ？」と永は驚いて言つた。遙かの水平線から海面がほのぼのと明るくなつた。
 「平壤へ」

「何故だ」

「歸りたくなつた」

「歸ると陰謀者として捕縛されるよ」

「捕縛されても可い。僕は賣國奴にはなれん」
 「本當か」

「うむ」

「永梅吉は黙つて嗟歎した。

「爾だらうと思つたよ。君は愛國者だ」

「君も愛國者だよ」

「そしてお互に敵となるんだね」と永は悲しげに言つた。

「仕方がないよ」

「可し、では短艇を貸さう」

「難有いな、總督に會つて行かうか」

「いや構はん。總督は恙う言つた。あの男は屹度今夜中に歸るだらうとね」

「そんな事を言つたか」

「では明けない内に行たまへ」

永梅吉は五郎を短艇に載せた。

「左様なら兄弟、又會ふ時もあらうぜ」

「いろ／＼世話になつたね」

「お互様だよ」

「何だか名残惜しいな」と五郎は胸が一ぱいになつて言つた。

「詰らない事を言ふなよ、さあ手を出せ」

五郎は舟に立ち永梅吉は岸に立て互に固く手を握つた。

「總督によろしくね」

恙う言つた時、瘦せた長い姿が岸に現はれた。銀髪が曉の色に輝いて顔の半分は暗く半分

は明るい。

「左様なら」と五郎は一禮した。李成民は黙つて目送した。

爆弾事件が朝鮮八道を震駭した。京城の總督府は急に活氣づいた。新聞は號外を以て傳へた。憲兵巡査は四方に走つた。軍隊が示威的に市街を練歩いた。此の騷擾の中に楠總督は極めて沈着に例日と何の異つた色を見せなかつた。

「あれは不逞鮮人ではない。馬賊共が掠奪に来たのだ」

總督は只だ慙う言つただけであつた。此の一言は其れから其れへと傳はつて、如何にも其れが事實の真相であるかの如く市民が信する様になつた。其の日の夕方には最早大風の翌日の如く市民は極めてのんきに商賣を續けた。

だが侯爵の肚の中は殆んど煮えくり返る如くであつた。爆弾は外國製のものらしい點だけでも侯爵の肝臓がはち裂れさうであつた。

「小僧ども生意氣だ」

無論陰謀團に違ひない。李成民の一族に違ひない。金貨を掠奪して軍資にする方策に違ひない。可しッ此の機に乗じて彼等の根を絶ち葉を枯らすまでやつてやらう。

此の騷擾を聞いて晶子や實等は竊に胸を痛めた。汽車の顛覆で死者は少かつたが負傷者が極めて多かつたさうだ。若し五郎が其れに乗つて居るものとすれば安否が氣遣はしい。侯爵に訊かうにも侯爵は一室に籠つて顔も見せぬ。四人は種々協議の上で到頭侯爵に迫る事に決した。そこで晶子は侯爵の就寢前に室へ行つた。

「なにか用か」と侯爵は卓子に肘を置いて窓の方を見詰めて居つた眼を移して言つた。

「はい、五郎さんが何時見えるんでせう」

「私は知らん」と侯爵は怒るもの、如く言つた。

「彼奴は逃亡した」

「えッ？」

「汽車の顛覆を幸ひに巡查の手を逃れて行方を晦ました」

「何處へ行つたか解りませんか」

「解らん。報告に依ると彼奴も陰謀團の一人らしい。怪しからん奴だ」

「其れは本當でございませうか」

「もう可い」と侯爵は立ち上つて、「彼奴は駄目ぢや、お前ももう決心するが可い。明日の朝奥田を召で約束する積だ。爾思つてくれ」

「でも私は……」

「もう可い」

「五郎さんは決して」

「もう可い、彼方へ行け」

侯爵は苛々して室内を歩きながら言った。何が何やら解らない。がみ／＼と言って獨り決めに決めて居る。それが侯爵の癖で、恚うなるともう何を言っても取上げない。晶子は靜かに室を出た。居室へ歸ると三人が待て居た。晶子は悄然として一伍一什を語つた。

「行きませう／＼」と菊子が言つた。「五郎さんを探しに行きませう」

「行つても當てがないからな」と實は沈んだ。

「當てがなくても行きませう」と菊子は勇んで、「兎に角も五郎さんが陰謀者でない事を證明するためには五郎さんを伴れて來なけりやならないわ」其れにぐ／＼してると晶子さんが奥門さんと結婚なさらなければならなくなるわ」

「でも侯爵の御許しが必要ならば」と實は途方に暮れた。

「逃げるのよ、無論よ」と菊子は言つた。

「私も爾思ひます」と晶子は決然と言つた。「貴方方が被行やらなくても私一人だけでも行かな

きやなりません」

「晶子さんが其の氣なら僕は決して異存がありません。實は僕一人で行かうと思つたのでした」と實は笑つて、「六藏君、君は」

六藏は何にも答へなかつた。彼は既に室の隅に蹲んで旅の荷作りをして居た。

一八

其日は終日雨まじりの風が吹いて、五郎が大同江を溯り平壤に着いたのは黄昏時であつた。彼は短艇を乗り捨て、眞直に我が家を指して急いだ。彼の服は雨に濡れて、靴は破れて居た。村の入口に來ると雨が歇んで牡丹臺の上の方に青い天が覗きかけて居た。

「入獄してから此に半月餘りである。金公は何もしたらう。日本語を教はりに來る村の人達は

「何もしたらう」
彼はそんな事を考へながら足を急いだ。彼は懐かしき我が家の前に來た。と見ると家は鎖されて灯影も見えない。

「金公々々」と彼は表から呼んだ。答がない。彼は戸を叩いた。矢張答へがない。そこで彼は裏の土塀を乗越へやうと廂に手を掛けた。途端に彼の上衣を惹くものがある。彼はぎよつとして夕暮の薄闇に其の方を見た。

「誰か」

「私」といふ聲は女の子である。汚い服を着て足は杳も穿かず脛まで褰けた上に泥が膝を染めて居る。

「お前は誰だ」

「私」と女の子が辛と日本語で言った。

「はて、誰だつたらう」

「私の牛を返して下さいました旦那様」と少女は言った。

「あ、お前は柳小か」五郎は漸く思ひ出して言った。名前を言はれて柳小は微笑した。

「お父さんは無事か」

「はい」

五郎は再び塀に登らうとした。

「不可せん」と柳小は言った。そして慌しく其の手を惹いた。

「どうしたんだ」

「警察が探して居ます。今朝から十返も來ました。早く〜」

凡ての様子が解つた。五郎は惹かる、まゝに娘と共に走つた。娘は低い土竈の様な家の前に立停まつて五郎を押し入れ、自分は四方を見廻してから續いて入つた。

「誰か」と韓語で言つた聲は親父の林清老であつた。

「旦那様を伴れて來た」と柳小は小聲で言つた。

「おう〜」と老父は唸りながら闇の中に牛の様に起き上つてのそ〜と歩み寄り五郎を一目見るや否や前に跪いて幾度も〜禮拜した。柳小は土の埤壙に高粱の殻を焚いた。赤い火がめら〜と燃えて室内を照した。室は四方壁ばかりで、處ろ〜に奇怪な形をした人の像や呪咀を描いた紙が貼られてあつた。其れが汚い着物や釣竿や農具などの影の間にちら〜と見えるのであつた。柳小は燃え上つた火を抑へる様に薪を燻べて凝と五郎を見詰めて居た。林清老

は静かに語り続ける。

「私のために警察へ御出になつたと聞いた時私はどんなに吃驚したか知れませんがもう氣狂の様になつて、あの晩は警察の門前で一晚を明かしました。それから毎日朝から晩まで警察の前に立ちましたので到頭巡査に叱られました。昨夜は貴方が汽車に乗ったのを見ました時に、もう二度と御眼に掛れまいと思つて居ました」

老爺は慙う語つて零時涙を呑んだ。而して又語り出す。

「今朝からは警察が貴方の御宅を調べて種々なものを運んで行きました。貴方には御眼に掛りたいけれども、若御歸りになつたら又もや警察に引かれるだらう。其れなら寧ろ御歸りにならない方が可いと娘が言ひますので……私は老人でございませぬから最早死んでも構ひませぬけれども後に残る娘一人……」

慙う言つたとき老爺は何も言へなくなつた。

林清老の述懐に五郎は我が身の危険を知ると共に憤怒の情が一時に燃え立た。

「日本の政府が何故に弱者を苛めるか。何故に正しきものを迫害して不正者を助けるか。慙る酷吏があればこそ日本の信用を失ひ本國政府の方針が誤られ、遂に世界の反抗を招くに至るのだ。眞正に日韓の親睦を厚うするには第一慙る俗吏共を一掃しなければならぬ。而して無智の人民を給く日本の實業家や浮浪人や投資者を勦滅しなければならぬ。彼の若い血は漲つた。」

「よしッ僕は警察へ行つて談判してやらう」

「其れが不可い」と老爺は慌て、制めた。「昨夜の爆弾事件で貴方が不逞の一味だと疑はられて居ます。今警察へ飛込むのは火に入る夏の蟲の様なものでございます」

「併し僕には何の疚しい事がない」

「正しいものが正しいで徹る位なら私共が牛を奪られやしないのです」

「うむ」と五郎は詰まつた。

「其れでは什麼すれば可いのだ」

「慙う言つた時、娘は片手を舉げて二人の對話を遮り壁に耳を着けて霎時凝とした。竈の火がふつと消えて眞暗やみの中に娘の白い顔ばかりが残る粉火に照れて見えた。」

「お寢みなさい」と爺はアンペラや毛布や何や彼やを敷き並べた。五郎は直横になつた。

「刑事が三人」と柳小が小聲に言つた。それきりで三人は黙つた。壁の上の方に小さな窓がある。窓から月が射して居る。天の色は鼠色で今にも雨が降りさう。雲が多いので月は光つたり暗くなつたりする。五郎は其れを眺めてる中にうとくと眠に落ちた。

突然彼を揺り起すものがある。頭を擧げると其れは老爺であつた。

「早く〜」と老爺は言つた。

「どうしたのだ」

「支度が可いんです」

「何の支度か」

「遠くへ〜〜」と老人は言ひ續けた。「貴方此處に居ると生命が危ない」

五郎は直ぐ起つた。裏口へ出ると土塀の下に一輛の荷車があつた。車の前に動いて居るのは

「頭の赤牛である。老人は五郎を荷車の上に乗せて、而して堅く五郎の手を握つた。」

「御無事で：：旦那様」

「慙う言ふ聲は喉に塞がつて、五郎の手に涙がぽと〜落ちた。」

「何處へ行かう」と五郎は言つた。

「何處でも〜」と老人が言ふ。

「牛の車では走れないよ」

「娘が知つて居ます娘が」

「慙う言つた時彼は娘を確かと抱いて頬に頬を押し付けた。柳小の手が父の首に絡み付いた。」

「さあ〜行け」と老人は柳小を車に乗せて、「旦那様娘を〜」

「あ、柳小も行くのか」と五郎は愕然として言つた。

「御恩返しをしたいと娘が言つた。娘は牛を能く走らせます」と老人は言つた。

「では御父さん」と五郎は言つた。而して牛の尻を軽く叩いた。車が動き出した。

「身體を大切に」

柳小は振向かなか

鈍いと思つた牛は急に走り

を照した。重さうな雲がはるかな水平線に暗く翳つて居る。

約四五里も走つた頃牛は段々に疲れた。其れまでは五郎の肚の中に何處といふ目的もなかつ

た。只だ危急を脱れて走つただけであると氣附いたので彼は當惑した。

「何處へ行くか」と彼は柳小に訊ねた。柳小は顔を此方へ向けた。黒い眼だけが特に鮮明と見え

えた。

「貴方の好きな處へ」

「僕には解らん」と五郎は答へた。柳小は落膽して鞭を車の上に落した。而して五郎の顔を見

詰めた。

「貴方、日本人でも行き處がないの？」

振り返ると老爺の白い頭が壁に凭れてるのが見えた。

いを拭きく牛を叩いた。

一望千里の高梁の間を牛車が駛り行く、月は二人の行手

を照した。重さうな雲がはるかな水平線に暗く翳つて居る。

約四五里も走つた頃牛は段々に疲れた。其れまでは五郎の肚の中に何處といふ目的もなかつ

た。只だ危急を脱れて走つただけであると氣附いたので彼は當惑した。

「何處へ行くか」と彼は柳小に訊ねた。柳小は顔を此方へ向けた。黒い眼だけが特に鮮明と見え

えた。

「貴方の好きな處へ」

「僕には解らん」と五郎は答へた。柳小は落膽して鞭を車の上に落した。而して五郎の顔を見

詰めた。

「貴方、日本人でも行き處がないの？」

「私日本人なら何處へでも行けると思つて居ました」

「僕はく日本人でなくなつた」と五郎は突然大きな聲で言た。そして聲を擧げて泣き出した。

二〇

「僕は日本人でなくなつた」と言つた自分の聲に五郎は急に悲しくなつた。彼の頭の中は恰ら渦巻の如く掻き亂された。

「僕は日本人でありながら日本の警察に迫害されて居る」と第一の聲が言つた。

「歸れば牢獄に入れられる」と第二の聲が言つた。

「僕は生きて行きたい」と莊嚴な第三の聲が言つた。

「自分が自分を保護する権利がある」と第四の聲が言つた。

「何處へ行かう」と混合した聲が言ふ。其の聲の中に彼は他の聲を聞いた。

「お前の膝元を見ろ、お前の懐に生命を託して居るものがあるぢやないか」

五郎は突然吾れに復つた。車は石の如く靜かに停まつて居る。牛は首を低れて草を食むで居

る。月は西の水平線に沈まうとして恐ろしい腥紅色を帯びて雲の間に力なく掛つて居る。前途は暗い。右も左も暗い。而して柳小は絶望の姿のまゝ、首を少しく斜に五郎の肩に押付け微に呼吸して居る。彼女は眠つて居るのであつた。

「あ、柳小」と彼は肚の中で言つた。「世界の中に國のない人間が二人ある。それはお前と僕だ。お前と僕は日本人でなく、朝鮮人でもない。あの月が今二人を照して居るが、其れは此の平野の高梁の上に住むべき家もなく彷徨いてる二人を照してゐるのだ。一つの國の人民としての二人を照して居るのでない。恐らくは世界が創まつて以來、あの月が慍ういふ不思議な人間を照したのは初めてであらう。鳥に巢あり狐に穴ありと基督は羨むだ。お前と僕には國がないのだ。若しありとすれば此の車の上は二人の國だ。不思議な國に住む不思議な二個の動物だ。柳小よく眠れ、眼がさめると悲しくなる」

五郎は鞭を取た。そして牛の手綱を牽いた。車が動いた。

「二人の國が動いた」と五郎は淋しく笑つた。と此の時彼は遙かに閃々する火光を認めた。

「人家があるぞ」

彼は勇氣を得て牛を追ひ立てた。柳小は快よく眠つて居る。折り／＼車の動搖に彼の女の頬が五郎の首筋に觸れた。その時は彼女は驚いて眼を開いた。

「可いよく、よく眠れよ」と五郎は其の頭を撫てやつた。

「濟みません」と言つて柳小は又眠つた。

「子供だなあ」と五郎は微笑した。

火光が段々に近附いた。一點、二點、三點、次で其れが人聲と共に一團の群である事が解つた。彼等は靜かに——極めて靜かに動いて居る。其れは丁度葬式の行列の様に莊嚴なものであつた。約十人目位に一つの角燈が宛がはれて居た。彼等の一人が叫んだ。

「牛が居る」

「車がある」

「人が居る」

聲々が起つて行列が亂れた。而して三つの角燈が此方に向けられた。五郎は牛を停めて人々を見やつた。

「やあ、秋山さん」

人々の中から出て来たのは永梅吉であつた。

「おう」と五郎は驚いて、「此の娘を助けてくれ、此の娘を」

永梅吉は柳小を灯影に認めた。而して事の様子を早くも覺つた。

「やつぱり君は行かなけりや可かつた」

「仕方がないよ。だが君等は何處へ行くつもりだ」

「船が来るまで逃げ廻つてるのだ」

「舟とは？」

「迎ひの舟が」

「どこへ行くのだ」

「間島へ」

「間島？」

「うむ、だが今頭領が病氣なんで困つてるんだよ。まさか短艇でも行けないから」

「あ、君等も國のない人間だつたね」と五郎は慨然として言つた。

「一緒に行かんか」

「うむ僕も仲間に入れてくれ」

「入るか」

「うむ入るよ」

永梅吉は眞面目な五郎の顔を見上げた。

霹靂火

平壤警察署に暴徒の嫌疑を受けて身を容るゝに處なく遂に陰謀團に加入した五郎は直に永梅吉と共に頭目李成民の前に出た。

李成民は持病の癩麻質で起居が極めて不自由であつた。彼は其の苦痛を部下に見せまいと努むるものゝ如く折り／＼顔を擧めて直其れを笑顔に變へるのであつた。白髪白髯を灯の火に照して地圖を案じて居た彼は五郎を見て凡ての事を洞察した様に首肯いた。永梅吉は一伍一什を述べて五郎の加入を申出た。

「いや／＼」と彼は首を掉たし「貴方は日本人だ。私達は朝鮮獨立のために日本に反抗するものだ。貴方は私達の仲間になつては不可い。私達も其れを好まない」

「併し閣下、秋山氏は日本に迫害せられて身を寄するに處がないのです」と永梅吉は言た。

「いや／＼もつと考へなきやならん。もつと能くね」と李成民は巧な日本語で言て霎時眼を閉ぢ「併し行き處がなければ當分御世話をしてあげるが可からう當分だけね」と永梅吉を顧み、

「此の若い人の一生を誤らす様な事をしては不可い」
其れだけ言て沈黙した。五郎は此の老人の一言々々が肺腑より出て居る様に思はれた。頭目の前を辭して室に歸ると柳小は心配さうに黒い眼を瞬いて待て居た。

「安心せい、當分此の人達の厄介になるのだ」
慙う言た時柳小は微笑した。そして其の儘ころりと横になつて眠つた。五郎は獨り黙想に耽つた。

「楠大將は日本の英傑である。併し會つて話をするると粗放で傲慢で單に昔風の豪傑だと思はせる許りで他に人間としての美しさを見る事が出来ない。然るに李成民は一見すると只だ一個の翁に過ぎないが、理非の判断の上に極めて緻密な人情味を持つて居るのが解る。あの人は味方を愛すると共に敵をも愛する。あの人は凡ての人類を愛して居る。そしてあの人の行動は此の發露

の様に思はれる。楠大將には道徳もあり理性もあり勇氣もあるが愛がない。國を愛するだらうが人類を愛しない。李成民の愛は普遍的で眼中國境がないのだ。二人の差異はこれだけだ。此の日から五郎は賓客として人々に遇せられた。五郎は毎日李成民に接近して種々な質問をした。而してその度に其の人格に敬服した。閣下が若し日本に生れたなら今日の政治家以上の人として世界に認められるだらうと思ひます」と五郎は或日言た。

「そんな事は、決して」と老翁は慌て、手を舉げて制める様に言た。「私は日本政治家の様な豪い人には逆もなれない。只だ私は私の國のために心配して居るだけです」

「心配とは？」

「私の國を米國へ與りたくない。左りとて日本にも奪られたくない。二つの強い國に介まつて獨立する力もなし、此の儘で過すと八道の人民は國が無くなります。其ればかりが心配なので、私を豪い人と言つて下さるな。私は只心配をする人なのです」

「心配をする人！」と五郎は感激した。自分のためではなく人類のために心配をする人！それほど美しい人は他にあらうか。

近づけば近づく程五郎は益々李翁に心酔した。十日は過ぎ二十日は過ぎ時は梅雨期に入た。其の間に諸所に暴動の噂を耳にした。間島の一團が捕はれた。上海の一團が逃亡した。水源で虐殺があつた。飛報紛々の度毎に同志の人々は昂奮した。

「どうにかしなければならん」

「早く人数を集めて一時に平壤を襲はう」

若い連中は頻りに李翁に迫つた。

二

人々が迫るを斥けて李翁は少しも動かさなかつた。到底爲すあるに足らずとして憤然同志の群を離れて去つたものもある。漸次糧食の缺乏に愛想を盡かして逃亡したものもある。併し李翁は平氣であつた。而して殘黨を率ゐて西に隠れ東に逃れ巧に踪跡を晦ました。

一同が假りに居を定めたのは兼二浦の丹峯山の裏であつた。兼二浦は鐵山を以て有名な土地

で三菱の經營する製鐵所がある、其處に入込む日本支那朝鮮三國の人夫は數千人に達して居る。李翁は其の率うる同志の大部分を此の鑛山人夫とした。而して自分はほんの麾下の士七八人と共に山の奥に隠れた。五郎も其れに従つた。大陸續きの事とて霖雨が限りなく續く、天は薄曇色に濁つて終日終夜の雨がざあ音立て、居る。何時晴れるべくともない。土壁を繞らした小屋は雨が浸み込んで隙間といふ隙間から濕氣が襲うて來る。毎日夕方になると李翁は儂麻質の痛みて七顛八倒の苦みをする、そして怵へきれなくなるとモルヒネを飲んで痛みを凌ぐのであつた。彼の最も恐るゝのは夕方である。六時頃になると彼は死刑を待つ罪人の如く寢臺の上に登つて其の一日の大苦闘の來るを待つて居る。

「實に可愛さうだ」と五郎は思つた。而して李翁が苦み出すと共に自分も胸が潰れる程痛みを感じるのであつた。

「なぜ早くモルヒネを飲まないのだらう」と彼は毎も思つた。或日其事を李翁に言ふと李翁は笑つて言つた。

「モヒを飲むと痛みが止まる。併し屢々飲むと壽命が縮まるから、出來る事なら飲まずに痛

を怵へて居たいのだ。人間には誰でも最後の靈藥がある。だが靈藥は猥りに用うべきものでない。

五郎は此の言葉の中から何等かの意義を見付け出さうと思つたが何も得る處がなかつた。同士の人々は頻りに密議を凝らした。李翁の病も左る事ながら徒らに時日を費やすのは愚の極だ。どうしても一日も早く事を擧げねばならぬ。此の協議の最中に鑛山に居る人夫共から頻々として報告が來た。上海に假政府を設立した。間島には約三千の兵を蓄へた。露國から逃れて來た兵は掠奪隊を組織して日本の商店を襲撃しやうとして居る。此の機逸すべからず。

最後の報道は頗る重大であつた。其れは七月一日楠總督が平壤を巡視すべしとの布告が出た事であつた。

「此の機會を逸せば吾人は永久に起つ能はじ」と人々は叫んだ。

「爆彈！」

「狙撃！」

聲々が嵐の如く李翁に迫つた。

「いや〜」と李翁は首を掉つた。「私に考へさせてくれ。私に、私は三日の間に決答するから」
若い人達は三日目を待ち、詫びた。李翁は毎日昏々として眠つた。而して眼が覺めると、淋しく雨天を眺めて居た。

「閣下は何時でも大事件を決する前には必ず二三日眠り続けるのだ」と永梅吉は五郎に語つた。
三日目が来た。人々は李翁の決答を待つた。其れは李翁に取て最も恐ろしい夕暮の来る少し前の五時頃であつた。雨は強くもなく弱くもなく平凡な單調を續けて降つて居た。李翁は寢臺の上に取り上つた。而して靜かに言つた。

「秋山さん〜」

五郎が傍へ行くと李翁は黙つて五郎の顔を見詰めた。

「秋山さん、貴郎は今日只今此處を出て行つて下さい」

「なぜですか」と五郎は言つた。

「なぜと訊いて下さるな、貴方は日本人です」

「併し……」

「いや〜」と李翁は嚴然と制めて、「私は貴方に御願があります」

「どういふ御用ですか」

「此の手紙を表書の人に届けて貰ひたい」

「手紙？」と五郎は李翁が衣匣から出した封書を受取つて見下した。

「大阪市淀川銀行大島隆二殿……」

五郎は吃驚して思はず封書を床に落した。

三

朝鮮陰謀團の首領李成民から我が愛する父に封書を送るとは夢にも思ひ到らぬ事である。五郎は一旦取落した封書を拾ひ上げて李成民の顔を見上げた時電光の如く頭に閃いたものがあつた。

「これが僕の實父だ」

慙う思うて彼は再び翁李の顔を見詰めた。彼は我ながら顔が火の如く熱した事に氣が附いた。

これが生みの父だ。確かに爾だ彼は一二度肚の中で唸つた。何とも知れぬ戦慄が總身に起る。彼は此の熱狂した渦巻の最中に又此の芝居じみた奇遇に恰ら自分を小説の主人公と見る様な一種の好奇心も起つた。

「其の手紙を其の人に……」と李翁は漸く催し來る病苦に堪へながら言つた。

「僕は此の人を知つて居ます」と五郎は答へた。

「此の人は……」

言ひ掛ける途端に永梅吉が突然走り入つた。

「總督、今夜です。九時です……」

「うむ、解つた」と李翁は答へて床の上に横になり「そろそろやつて來た。モヒを取てくれ」

「君は彼方へ行つてくれ給へ。僕は密談があるから」と永梅吉は五郎に言つた。五郎は今一度

李翁の顔を眺めた。烈日寒風に曝された顔は土の如く黒く其の顔と眼は雪の如く白い。痛みを

泳へる眉宇の間には國歩艱難の皺が深く刻まれて隆々とした喉骨が息をする度にごろりと鳴

る。

「こんなに年を老ても國家のために奔走して居る。これが僕の父だ。僕の生みの父だ」

彼は父の傍に寄つて其の手を取りたかつたのである。

「誰も居ない處で、今夜中に父子の名乗をしやう」

彼は慫う思ひ返して室を出た。外へ出ると柳小が立て居た。頃日五郎は餘り柳小に言葉を掛け

なかつた。其れは自分の屈託にもよるが今一つは子供は子供らしき自由な生活をさして置く方

が可いといふ考へからであつた。柳小は五郎の姿を見るや直ぐに嫣然して指先を嘗めて堀の壁

に字を書いて見せた。

「秋山武男」

一字を書く度に慫うでせう？と首を傾けて訊いた。

「うまい、能く書ける様になつたね」と五郎は賞めた。柳小は耳元まで赭くして顔を隠したが

其れでも嬉しいと見えて次に自分の名を書いた。

「柳小」と五郎は呼びかけて「お前は御父さんの處へ歸りたくはないか」

柳小は黙つて五郎の顔をしみじみと見上げたが、「い、え」と答へた。

「なぜだ」

柳小は黙つて又もや塀に字を書いた。と見ると彼女は跣である。

「お前靴がないのか」と五郎は訊いた。

「はい」

「どうした」

「日本の人に奪られました」

「どんな奴だ」

「坑夫です」

「顔を知つてるか」

「はい、けれども私は靴が要りません」

「どうして？」

「窮屈ですから」

いかにも柳小は跣足で駆け廻つてゐる事が多い。併し長雨続きの此の頃に靴が無くては外へ出る事も出来ない。此頃日本の坑夫が折々此の邊に来て物品を強奪して行くのが流行る。

「僕が取返してやる」と五郎は怫然として言た。

「何處へ行た」

「向ふへ」と柳小は山の下を指さした。

「よしッ待て」

四

柳小の靴を取返さうと五郎は山を降り諸所方々を探したが皆目行方が知れなかつた。其の中に日が段々と昏れて来る。雨は益々降りしきる。五郎は吾と我が馬鹿々々しさを悔いた。彼は直に足を返して闇路を辿つた。漸く小舎に歸つた時には總身雨に濡れて居た。彼は先づ小舎が平素より静かである事に氣が付いた。小舎の前の泥濘はごちやごちやに亂れて木材や藁屑や棒

切などが散らばつて居た。家へ入ると音が無い。人といふ人の影もない。
 「どうしたんだらう是れは」と五郎は呆氣に取られて立ち盡くした。
 「柳小々々」と彼は聲高く叫んだ。

「はい」

直ぐ闇がりの隅にぱつと灯が點つて蠟燭を持つて立ち上がった柳小の顔ばかりが明きらかに見えた。

「どうしたんだ」

「皆んな行つてしまひました」

「何處へ？」

「何處だか解りません」

「何時？」

「貴方が御出になると直ぐ」

五郎は直に寤藏へ走つた。其れは家を去る二三十間の崖の中程を截開いて爆裂彈を藏ひ込んで

である處である。寤藏の中には彈藥の箱が悉く影もなかつた。

「いよく行りに行た」と五郎は叫んだ。而して直ぐ家へ引返した。

「柳小、蠟燭を持て来い」

柳小は裸の蠟燭を眞直に持つて進み寄つた。五郎は板片を拾つて其に蠟燭を立てた。而して衣匣から先刻李翁に託された手紙の封を切つて讀み下した。雨は恐ろしい音を立て、降り注いだ。外からの濕氣が闇い壁を透して蠟燭の火に浸み込みさうに思はれた。

手紙は果して五郎の想像通りであつた。李成民は彼の父であつた。日本人に解り、
 文で認めた、文字の墨色で判ずると此手紙は幾日もく掛つた事が解る。先第、
 我子を拾ひ上げて養育してくれた海山の恩を謝し、此恩を報うる機なくし、

るべからざる事由を述べた。而して高恩ある貴下の郷國に向つて反抗す

しきを知ると雖も一人の情交を以て八道四千萬人の獨立を阻むは

ると論斷した。而して敢て事を好むにあらざるも窮鼠却つて猫を
 れざる國民が生よりも死を希ふは理の當然である。屈辱か死

慨の氣が紙上に溢れて居た。而して終りに只だ心に掛るは一子
 父は韓人なりと知らして下さるな、知らざれば太平の民として一
 し是れを知つたならば彼は亡國の遺民、野良犬の如く肩身を狭くしな
 ふと私の志を繼いで韓國獨立のため子々孫々流るなかれと言ひたいの
 ひ彼を育てたものは貴下であつて彼の食んだものは日本の米である。國土
 ならぬ。彼は純然たる日本人である。私は彼が日本の國に必要な人間である事
 下に報する一端で又亦私の子を愛する所以である。

説き去り説き來る理論は整然として其中に愛國の氣宇が輝いて居る。五郎は讀み終つて
 りと床の上に倒れた。而して聲を揚げて泣いた。

「御父さんに國が無い。僕にも國が無い」

柳小は心配さうに五郎を見詰めてほろり／＼と涙を零して居る。蠟燭の火が際漏る風に左右
 に動いた。

五

五郎は急に起き上つて外へ出た。雨は瀧の如く彼の頭に肩に注いだ。眼を放つて見ると大陸
 的平野は油の如き闇に包まれて居る。其間に火光點々として或は高く或は低く或は煙或は星の
 如く列なるものは兼二浦製鐵所の灯火であらう。その他には何物も見へない。卒然として彼は
 天の闇と地の闇の間に只だ我れ獨り立てるを知つた。彼の天が何處まで續くとも彼の野が何處
 まで續くとも又此の雨が梵天の外より降り來やうとも、遙かに微明を帯びた大同江が何處まで
 流れ行かうとも、其れ等と自分とは何の關係もない。自分は只だ突然たる一個の人間である。
 一個の人間が天地の間に生れて其の歸する處は何であらう。水か火か一塊の土か、抑も晨に生
 れて夕べに死する蜉蝣の如きものか。何を喜び何を悲しみ何を憤るか。但しは何を耻辱とし
 何を名譽とするか。而して互ひに顔を蔽めて何を罵り合ふか何を争ふか。人と人が争ひ國と
 國とが争ふ、其れは卑しい欲望の發露に過ぎぬ。闇の中に立てる我こそは眞の人間であるまい
 か。日本でもなし朝鮮でもなし國籍以上の高山に立つものこそ眞の人間であるまいか。